

2020年度 第一回 卒業論文指導会

日時:7月1日(水) 13:00～16:30

オンライン開催 <https://us02web.zoom.us/j/86384522031?pwd=aTZCdGNDT0E2Y1pGTDdwYjNKWE8wZz09>

学生発表2分、質疑応答5分、計7分

発表順(予定)	氏 名
1	下山 明彦
2	原 ゆり子
3	佐々木 昂
4	佐橋 優人
5	寺道 亮信
6	足立 将彦
7	石毛 ゆか
	♪休憩♪
8	石元 悠一
9	磯崎 友絵
10	岩崎 拓己
11	宇佐美 堯也
12	内山 幸奈
13	江崎 愛梨
14	小川 護央
15	下山 航輝
	♪休憩♪
16	中山 慎太郎
17	萩野 貴明
18	花井 洸太
19	藤本 和平
20	山本 健介
21	用害 桃子
22	山室 彬紗
23	真庭 伸悟
	(登阪 亮哉)

1. 2020 年度卒業論文関係の日程（予定）

（1）第 2 回卒業論文指導会：2020 年 11 月 4 日（水）15：00～予定

（2）卒業論文題目届の提出期限：11 月 24 日（火）～12 月 1 日（火）17:00 締切

※ 教員の印鑑が必要。

※ このとき提出した題目はあとから変更できないので、教員とよく話し合ってから決めること。
題目届のコピーを手元に残しておくこと。

※ 今年度卒業しない場合は、卒業延長届を同期間に提出する。こちらも教員の印鑑が必要。

（3）卒業論文の提出期間：2021 年 1 月 5 日（火）～1 月 8 日（金）16:30 締切

（4）卒業論文要旨の提出期限：1 月 5 日（月）～1 月 12 日（月）16:30 締切

（5）卒業論文口述試験：2 月 4 日（木）予定

※ 口述試験は発表会形式で行なうので、3、4 年生は全員出席すること。

※ 発表方法に関する指示は、決まり次第連絡するので、メールで確認すること。

2. 基礎教育学コース 卒業論文提出様式

・A4（1 頁 40 字×30 行、10.5 ポイント）で、17～34 枚＝400 字詰原稿用紙換算で 50～100 枚。

※ ページ数については目安とする。ただし、規定のページ数を超える場合には、教員の許可を得ること。

※ 枚数に註・図表は含めるが、表紙・目次・参考文献一覧は含めない。

・印刷は上質紙を使用すること。

・コース事務室でファイルカバーを受け取り、綴じた上で提出すること（個人で購入しても構わない）。

※ 簡易製本を含む製本は避けること（審査終了後、研究室で製本の上、保存します）。

・その他提出様式については、学生支援チームの指示に従うこと。

3. 卒論執筆上の注意事項

・卒表論文の題目を、題目届のものと一致させること（卒業論文要旨についても同じ）。

・論文の書式、体裁、註のつけ方、引用の仕方などについては、以下の URL を参照のこと。

『基礎教育学コース版 レポート／卒論を書くにあたって』

http://www.p.u-tokyo.ac.jp/wp-content/uploads/2014/03/manual_kiso.pdf

（東京大学公式 HP 教育学部トップページ→在学生の方へ⇒「論文執筆マニュアル」の中の各コースの規定等：基礎教育コース、でも閲覧可能

・論文の書式、体裁等について、提出前に一度チェックを受けること。

・パソコンを使用する際、ファイルのバックアップについては、万全を期すこと。

・年末年始の教育学部棟への入館は事前申請が必要なので、必要な人は早めにコース事務の小林さんか TA に相談すること。

・卒業論文執筆期間（去年は 10 月末～）は、教育学部図書室の本（医学部 1 号館含む）を 20 冊まで、予約取り寄せの本も 20 冊まで借りることができる（図書室の掲示を要確認）。

・基礎教育学コースの過去の卒業論文は、コース事務室にて読むことができる。

※本年度は COVID-19 対策のため、例年と異なる対応がとられる可能性もあるため、必ず各自で学生支援チーム HP や教育学部図書室・総合図書館 HP などをチェックすること。

・その他分からないことは、卒論 TA（川上、柏木、長戸、渡邊）までお気軽に連絡ください。
なお、メールを送信する際は TA 全員に宛ててメールを送ってください。

E-mail：hideaki99kawakami@gmail.com（川上）、mutsuki.k.1223@gmail.com（柏木）、
sabakinoryu@gmail.com（長戸）、masayukiw1993@gmail.com（渡邊）

1. 名前、タイトル（取り扱う予定のテーマ）

デザイン・シンキングにおける他者性の欠如に関する考察

2. テーマの概要や問題関心

2010 年代より、社会課題の解決に有効な思考フレームワークのひとつとして、デザイン・シンキングが注目されている。理論的研究を先駆けたマイネル、ライフアーによれば、デザイン・シンキングには 4 つの原理がある。

- ・人間性の規則 すべてのデザイン活動は究極的には社会的な性質を持つ
- ・曖昧性の規則 デザイン・シンキングの主体は曖昧性を保全せねばならない
- ・リデザインの規則 すべてのデザインはリデザインである
- ・触感性の規則 手で触れられるアイデアをつくることはつねにコミュニケーションを促進する

この規則のもとで思考を行うと、定義が困難であるために従来の最適化による方法では解決が難しい問題にアプローチできるとされている。

しかしこのような態度はポストモダン的な批判を免れない。例えばリデザインの規則はボードリヤールが批判したシミュラクルの再生産である。

本論ではデザイン・シンキングにおける到達不可能なものとしての他者性に対する視点の欠如を批判し、それを乗り越える可能性が芸術教育にあることを指摘したい。

3. 研究目的

日本でイノベーションが起きにくく、GAFA のような会社が生まれないという問題が提起されて久しい。その原因として、日本の企業活動における思考のフレームワークが近代性乗り越えられてないことを仮説として挙げる。そのうえで、イノベーションに必要なものとして有力視されているデザイン・シンキングの問題を指摘し、オルタナティブとしての芸術教育の有用性を理論的に検討するとともに、そこから社会人教育における芸術教育の望ましいあり方を検討する。

4. 今後の予定・方針、研究の方法

文献調査を主な手法とする。

デザイン・シンキングの理論およびそれに対する批判を検討したうえで、実践例と照らし合わせる。企業のデザインに関する現代思想の批判によってそれを補い、デザイン・シンキングが本質的に乗り越えられない対象を分析する。それを乗り越える可能性が芸術教育にあると仮説を立て、その理論的根拠を調査する。同時に芸術教育における実践と理論の乖離を整

理し、それを極小化できるような実践のあり方を考察する。

5. 参考文献リスト

Cross, Nigel. Design Thinking: Understanding How Designers Think and Work. Oxford UK and New York: Berg, 2011.

Meinel, Christoph; Leifer, Larry J., eds (2011). Design thinking: understand, improve, apply. Understanding innovation. Berlin; Heidelberg: Springer-Verlag. pp. xiv-xvi

千葉敏生訳『デザイン思考が世界を変える——イノベーションを導く新しい考え方』早川書房、2010 年

郷司陽子訳『問題解決ができる、デザインの発想法』ビー・エヌ・エヌ新社、2012 年

柳沢昌一、三輪建二監訳『省察的实践とは何か——プロフェッショナルの行為と思考』鳳書房、2007 年

M. フェザーストン『消費文化とポストモダニズム』川崎賢一・小川葉子 編著訳、池田緑 訳、恒星社厚生閣、1999 年

アラン・ソーカル、ジャン・ブリクモン『「知」の欺瞞 ポストモダン思想における科学の濫用』田崎晴明・大野克嗣・堀茂樹訳、岩波書店、2000 年

水原俊博. "初期ボードリヤールにおける資本主義仮説の検討." 応用社会学研究 46 (2004): 117-136.

https://rikkyo.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=1804&item_no=1&attribute_id=18&file_no=1

石津珠子. "芸術教育論における美的教育について." 東洋英和大学院紀要 14 (2018): 17-25.
https://toyoeiwa.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=1448&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1

徳久悟. "日本の大企業を対象としたデザイン・シンキング活用事例の分析にもとづくデザイ

ン・シンキング導入モデルの構築." デザイン学研究 65.4 (2019): 4_37-4_46.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jssdj/65/4/65_4_37/_pdf

山内 裕. "社会をデザインする：予備的考察." デザイン学論考 (2015).
https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/218165/1/vol.3_03_yamauchi.pdf

安藤拓生, and 八重樫文. "デザイン態度 (Design Attitude) の概念の検討とその理論的考察." 立命館経営学= The Ritsumeikan business review: the bimonthly journal of Ritsumeikan University 55.4 (2017): 85-111.
https://ritsumei.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=1227&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1

佐藤将史. "米国の大学・企業におけるイノベーション・デザイン人材の育成 (< 特集> 日本の未来の担い方)." 研究技術計画 28.2 (2014): 196-206.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsrpim/28/2/28_KJ00009297048/_pdf

荒川俊也, and 杉森順子. "アート作品を用いたデザイン思考型モノづくり教育の実践." 設計工学 53.3 (2018): 237-250. https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjsde/53/3/53_2017.2746/_pdf

竹野祐輔, et al. "1A01 異分野連携チームによるもの作りを通じたデザイン思考実践." 工学教育研究講演会講演論文集 第 64 回年次大会 (平成 28 年度). 公益社団法人 日本工学教育協会, 2016. https://www.jstage.jst.go.jp/article/jseeja/2016/0/2016_2/_pdf

後藤智, and 八重樫文. "デザインシンキング研究の課題と展望: 「デザイン思考」と「デザインシンキング」." 立命館経営学= The Ritsumeikan business review: the bimonthly journal of Ritsumeikan University 57.3 (2018): 45-69.
https://ritsumei.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=1335&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1

佐藤千里. "『オープンイノベーションにおけるデザインシンキングの意義』." 千葉商大論叢 54.2 (2017): 259-274.

https://cuc.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_action_common_download&item_id=5337&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1&page_id=13&block_id=37

森山真吾. "デザイン・シンキングを活用したカリキュラム開発の考察." 国際英語学部紀要 19 (2016): 25-30. https://chukyo-u.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=16707&item_no=1&attribute_id=54&file_no=1

岡本誠. "共有するデザインシンキング (< 特集> デザイン思考)." デザイン学研究特集号 20.1 (2012): 12-15.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jssds/20/1/20_KJ00008612397/_pdf

矢本成恒, 石井正道, and 北原康富. "ビジネススクールにおけるイノベーション教育." 開発工学 37.1 (2017): 21-25. https://www.jstage.jst.go.jp/article/kaihatsukogaku/37/1/37_21/_pdf

第一回卒論指導会発表資料

教育学部基礎教育学コース 4年 原ゆり子

1. テーマ

有用化に抗する思想としてのベルクソン

2. テーマの概要や問題関心

人の価値を有用性で判断しすぎる風潮への疑問が出発点となっている。

本来、人間の生命の深みは有用性という一面だけで語られるべきものではないはずである。しかし、有用性という観点から見て価値のない人間は死んでもいいというような言説は存在し、そのことから生きづらさを抱える人々が多いと思われる。

近年社会的問題として取り上げられる自殺の背景にも、人の価値を有用性で判断する考え方への偏りがあるように思われる。そのような考え方に苦しめられて起こったかもしれない自殺と思われる人身事故に対し、時折「死ぬなら迷惑のかからぬように勝手にどうぞ」というようなコメントを目にする。そのような声が弱っている人をさらに苦しめる悪循環があるように思えてならない。

もちろん有用性がなければ社会は成り立たないし、有用性自体は批判されるべきものではないだろう。しかし、有用化一色に染まりそうな社会の中で、有用性とは別の観点で生命について考え直すことで、前述のような悪循環を少しでも和らげることができないだろうか。

その手がかりとして、「生命の哲学」を考え続けたベルクソンをとりあげたい。彼の哲学は最終的にはキリスト教的な愛を目指したと言われる。キリスト教は日本ではあまり馴染みがないが、自身が6年間過ごしたキリスト教系の中学高校で「隣人を自分のように愛しなさい」という聖書の言葉が学校の創立精神として大事にされており、クリスチャンではないもののその意味を考えてきたこと、そして東大に入学して価値観の違いに戸惑いを覚えた経験も動機としながら、ベルクソン哲学における議論を読み解いていく。

3. 研究目的

ベルクソンを有用化へ抗する思想として解釈することで、教育において有用性とは異なる生命の価値を提示することを目的とする。

4. 今後の予定・方針、研究の方法

ベルクソンの晩年の著作『道徳と宗教の二源泉』を中心に、彼の思想を有用化批判の観点から読み解く。ただ彼の議論をまとめるだけでなく、現代社会の状況と関連づけながら論じていきたい。そのために、必要に応じて既存の有用性批判論や社会構造論にも触れる予定である。

5. 参考文献

田中智志『教育臨床学―〈生きる〉を学ぶ―』高陵社書店、2012年。

金森修『ベルクソン 人は過去の奴隷なのだろうか』NHK 出版、2003 年。

前田英樹『ベルクソン哲学の遺言』岩波書店、2013 年。

アンリ・ベルクソン『記憶と生』ジル・ドゥルーズ編、前田英樹訳、未知谷、1999 年。

アンリ・ベルクソン『物質と記憶』杉山直樹訳、講談社、2019 年。

アンリ・ベルクソン『道徳と宗教の二つの源泉』合田正人・小野浩太郎訳、筑摩書房、2015 年。

杉山直樹『ベルクソン 聴診する経験論』創文社、2006 年。

ジグムント・バウマン『リキッド・モダニティを読みとく』酒井邦秀訳、ちくま学芸文庫、2014 年。

ジグムント・バウマン『リキッド・モダニティ』森田典正訳、大月書店、2001 年。

ジグムント・バウマン『幸福論』山田昌弘訳、作品社、2009 年。

ジグムント・バウマン『廃棄された生』中島道男訳、昭和堂、2007 年。

1.仮のタイトル（取り扱う予定のテーマ）

『戸田唯巳の教師像の分析とそこから見る一つの理想の教師像』

2.テーマの概要や問題関心

1950 年代ごろから生活綴方運動、教育を行った戸田唯巳という人物について取り上げる予定である。綴方運動は戦前だと北方性教育運動といったものがあり、昨年度のゼミでは戸田と同じく戦後の綴方運動を行った人物として無着成恭に触れた。無着の運動も北方性教育運動（北方性教育運動については細かく調べられていないが）田舎の農村部で子どもの貧困や生活に根付いた綴方、作文教育であったようだが、戸田の場合は比較的都市部で綴方教育を行ったと記述がある。実際教育実践記録集の一巻の戸田によるあとがきで、都市部には生活綴方は育たないとよく聞いていた、と裏付ける記述があった。

それでは田舎、農村部での綴方は実践例が多かったようだが、都市部での綴方はどのようなものだったのか、といった点に着目と興味がわき、さらに次の研究目的と重なってしまうが、農村で行われた綴方教育は子どもの経済環境、具体的には極度の貧しさなどに根付いてしまう可能性があるが、都市部で行われたものであれば経済環境といった要因を取り除き、現代の綴方教育にもある程度普遍的に通じて言えることがあるのではないかと考え、その点を戸田の教師像、記述やエピソードから読み解けるのではないかと問題関心がわいた。

3.研究目的

まずは戸田が都市部で生活綴方を行ったということだが、どのような姿勢、スタンスで綴方教育を行っていたのかを戸田の著書から読み込んでいく予定。さらに、戸田の記述の中に、わだかまりのない教室づくりをこころがけていた、教師は子どもと同様すなおであるべきだ、といった記述がみられることから、そうした戸田の教師像は現代の教師にもある程度理想として言えるべきものがあるのではないかと読み込み、述べることを目的とする。

4.今後の予定・方針、研究の方法

すでに四冊ほど戸田による文献を読了しており、戸田の教師像の分析、理想の教師像とはどのように言えるか、という方針で書き進めており、今後もその方針で書き進める予定。ただ、小国先生からの提案もあり、戸田の綴方教育について年代ごとに絞ってみたり、年代ごとに絞ってその年代の代表作品を挙げて、それらを章のタイトルにしていくことも考えている。まだ文献は四冊ほどしか読めていないので、これから先文献を読み進めていく中で、小国先生のアイデアも借りつつうまくまとめて書いていきたい。その際、タイトルも上記のものではなく『戸田唯巳における都市の生活綴方』のようなものにして、章分けを先述したように年代ごとの取り組みで区切り、おわりに、の部分で理想の教師像みたいなものを述べるこ

とも考えている。また、戸田の文献だけでなく、戸田が影響を受けたとされる国分一太郎の本などにもあたってみたい、と考えており、そのほかにも似たような視点を持った教育者の文献も入手出来次第読んでみる予定。基本的には文献、可能であれば論文などの先行研究にあたってみて、より戸田がどのような教師だったのか述べていく予定である。もう少し問題関心とテーマを絞るべきかもしれない、と考えている。

5.参考文献リスト

すでに読んだもの

宮原誠一、国分一太郎『教育実践記録集第一巻』、1965 年、新評論（この記録集に掲載されている戸田による『学級というなかま』を取りあげる予定）

戸田唯巳『作文—どのように書かせるか』、1973 年、明治図書出版

戸田唯巳『お母さんと先生のつきあい方』、1994 年、教育史料出版会

戸田唯巳『綴方と教師』、1976 年、新評論

これから読む予定のもので、入手可能であると考えられるもの

戸田唯巳『教師 つまずきからの出発』、1981 年、あゆみ出版

戸田唯巳『ダメな子はいない』、1989 年、雷鳥社

戸田忠雄『「ダメな教師」の見分け方』、2005 年、精興社（戸田唯巳による文献ではないが、参考になれば引用する予定）

戸田唯巳『あせらないで お母さん』、1991 年、雷鳥社

戸田唯巳『子どもをダメにする教師』、1987 年、明治図書出版

戸田唯巳『あのねお母さん—子どもは考えている』、1987 年、雷鳥社

戸田唯巳『こんな一言が子どもをダメにする（みんなで考える教育問題）』、1981 年、明治図書出版

戸田唯巳『作文＝どのように書かせるか 続』、1980 年、明治図書出版

これから読む予定のもので、国会図書館に行かないと読めないもの

戸田唯巳『子どもの目は澄んでいる』、1985 年、明治図書出版

戸田唯巳『子どもの待っている一言』、1984 年、明治図書出版

戸田唯巳『意地悪先生：教師から母親へ』、1968 年、誠文堂新光社

戸田唯巳『手紙で訴える子ども』、1985 年、明治図書出版

戸田唯巳『学級というなかま』、1956 年、牧書店

戸田唯巳『子どもについて行く』、1958 年、のじぎく文庫

戸田唯巳『おかあさんの知恵』、1968 年、明治図書出版

戸田唯巳『子どもの求めているもの』、1976 年、明治図書出版

戸田唯巳『低学年の指導』、1970 年、明治図書出版

戸田唯巳『子どもに叱られながら：校長からの手紙』、1970 年、あすなろ書房

戸田唯巳『学校と家庭の間』、1978 年、明治図書出版

戸田唯巳『子どもの目・子どもの芽：いま教育に心があるか』、1980 年、教育史料出版会

国分一太郎『新しい綴方教室 増補版』、1953 年、新評論

戸田唯巳『子どもの思い』、1990 年、母と子社

戸田唯巳『「作文嫌い」はこうして生まれる』、1992 年、明治図書出版
以上です。

●研究タイトル(仮)

義務教育課程における、男性から女性へのセクシャルハラスメントの醸成過程

●概要

昨今セクシャルハラスメント(セクハラ)がよく議題に上がる。その内容は様々だが、主に物理的なハラスメントと言葉によるハラスメントの2パターンである。前者の物理的なハラスメントは俗にいう変態が行う行為であり、基本的には遺憾な行為である。しかし、後者の言葉によるハラスメントは受取手によって様々で、時にはハラスメントと言えないものではないか?と思われるようなものもある。例えば、「今日可愛いね」というような類の言葉である。

このように様々な言動がセクハラだと認識されることが多いこの世の中において、このセクハラが教育課程において醸成されたのではないか?という仮説が自分の中に生まれた。というのもセクハラが起これるのが教育課程をすぎた頃から問題視されるからである。

●問題関心

自分自身がこのことに興味を持ったのは、最近身の回りで女性にセクハラ認定されている男性をよく見かけるからである。もちろん物理的なセクハラは当然セクハラであり、許すまじ行為である。(ただし、「それでも僕はやっていない」のように冤罪疑惑のものは男性側がかわいそうだなと思う。余談だが、自分自身も深夜3時ごろにドンキホーテに行った際に女性から触られて大声で「セクハラ!」と言われた経験がある。そして、その後ろに怖めの男の人がいて、「あ、やられたわ。金出すの確定だ。」と思っていたところ、女性から「嘘だよ嘘。冗談だから怖い顔しないで」と言われブチギレそうになった。という経験があり、セクハラ冤罪は怖いと思っている。)ただし、言葉によるセクハラと認定されているものに関してはいささか疑問に思う場合がある。例えば、以前「今日服可愛いって言われたんだけど、完全にセクハラだよな」言ってきた女性がいた。そのレベルでもダメなのかと思い、「じゃあ佐藤健が言ったら?」と返すと、「それはめちゃ嬉しい」と答えてきた。もちろん言葉を伝える側の伝え方によって対応を変えるのはわかるが、佐藤健でOKというのは顔でセレクトしているのではないのかと思わざるを得ない。つまり、かっこいい人ならOKでそうじゃなきゃNGと女性が決めているのではないか?その考え方が全女性に広がりつつあるのではないか?と思った。最近SNS(twitter)などでもその類のツイートが伸びていることからそのように推測される。男性側からしたら不便な世の中である。

このような経緯からセクハラに関心を持った。

●研究目的

上記で述べたように、教育課程においてセクハラという問題の根源的要因が潜在的に生まれているのではないかという仮説が生まれた。もう少し考えてみると、セクハラには発言側か

らみた側面と、受取手からみた側面の2つのパターンで考えることができる。例えば、「君のスタイル良いね」と言えばおそらく発言側の問題であるし、「君の服装可愛いね」でセクハラとなればおそらく受取側にも問題がある可能性がある。このような2側面からセクハラを分析し、教育課程に置けるセクハラの根源を探することで、現在起きているセクハラ問題が理解しやすくなると思われる。

●今後の予定

まず、定義として男性から女性へのセクシャルハラスメントを取り扱う。また、物理的セクシャルハラスメントではなく言葉のセクシャルハラスメントのみに特化して取り扱う。

まず、男女数名ずつインタビューを行い、今までにセクハラと言われた経験、セクハラだと思った経験を集める。(この際にインタビューの仕方・伝え方には十分に注意する)そしてそのセクハラに共通項をいくつか見出して分類する。

そして、それらのセクハラ体験が教育課程において醸成されたのではないかという仮説を元に、どこで起き得たのか原因を探る(やり方未定)

●参考文献

和田美江(2003)「セクシャル・ハラスメントの不法行為評価(2・完)」,北大法学論集, 53(6), 251-305

中道基夫(2007)「キャンパスハラスメントの対策とその動向」,関西学院大学

松本克美(2005)「キャンパス・セクシャル・ハラスメントと大学の教育研究環境配慮義務」,立命館大学

金谷 美由紀, 大和田 攝子(2006)「セクシャル・ハラスメントの認知に対する心理教育的介入効果」

湯川やよい(2011)「アカデミック・ハラスメントの形成過程—医療系女性大学院生のライフストーリーから—」

加野芳正(1988)『アカデミック・ウーマン—女性学者の社会学』東信堂

水谷英夫(2001)『セクシュアル・ハラスメントの実態と法理』信山社

中丸澄子・兒玉憲一(2001)「広島大学大学院生が研究室で経験するハラスメントの実態」『総合保険科学：広島大学保健管理センター研究論文集』, Vol.17, pp.19-40

中西祐子・堀健志(1997)「「ジェンダーと教育」研究の動向と課題」『教育社会学研究』, 第61集, pp.77-100

西倉実季(2009)『顔にあざのある女性たち—「問題経験の語り」の社会学』生活書院。

御輿久美子・赤松万里(2004)『アカデミック・ハラスメントの実態調査研究—大学及び大学教員に対するアンケート調査結果報告書』(科研基盤研究(C)(1))報告書)

「しないことができる」とはどういうことか
——アガンベンの「非の潜勢力」、無為、それからメランコリー——（仮題）

テーマの概要・問題関心

書くことは一つの逆説である。アレント風にいえば思考を物化すること、そしてアガンベン風にいえば——可能態を現実態へと移行すること。書くことは勇気を要求する。自らが「中身の無い人間」であることを露呈するリスクに、自らを賭けるという点で。私はこうつぶやきたい——「書かないこともできるのですが（I would prefer not to write）」。アガンベンが「なにかをすることができる」とは、しないことができるということである」と書きつけるとき、果たしてそれは如何なる意味においてだろうか？

メルヴィルが描いた奇妙な書記官、バートルビーが彼を惹きつけたように、彼の術語もまた、われわれを惹きつけてやまない。「なんであれ（qualunque）」「非の潜勢力（adynamis）」、「到来する共同体」とは「なんであれかまわない存在」による共同体である。しかし、それらの概念に関して、彼が言葉を尽くして説明してくれるわけではない。

アガンベンはベンヤミンの身振りに魅了され、古今東西のテクスト（ときにはイメージにまで及ぶ）を自由闊達に駆け巡り、大胆な註釈を提示し、自己矛盾を孕むことこそが真実であるとでも言いたげなようにわれわれを攪乱する。ならば、気まぐれに彼の七つ道具と戯れてみることも、彼の意に介しはしないだろう。

後に偉大な社会学者となる十代の少年、見田宗介を悩ませていた近代の宿痾は、ニヒリズムとエゴイズムだった。彼は自分自身に対する答えとして、「世に容れられることを一切期待しないで」（そのため「真木悠介」名義で）、『時間の比較社会学』『自我の起原』という二つの労作を書き上げたが、時代の闇を生きる一人の陰鬱青年の心を巢食っていたのもまた、ニヒリズムとエゴイズムだった。

岩内章太郎は「何をしたいわけでもないが、何もしたくないわけではない」という欲望を抱くわれわれを、ポストモダン以後に生を享けた「メランコリニスト」と呼んでいる。無化すべき対象が現に存在したニヒリズムの時代と違って、大きな物語が崩壊したメランコリーの時代にあっては、無化すべき対象、意味すらも喪失している。彼の区分を採用するなら、私もまたメランコリニストだ。

ニヒリズムおよびエゴイズム、あるいはメランコリー。アガンベンの思想はこれらに一筋の光を差し込んでくれるように、私には思われる。それどころか、彼が手を変え品を変え超克を目論んだものの、そのものだったのではないか。彼が「なんであれ」というとき、共通の特性や所属、同一化は否定されている。目的論的世界観を拒絶し、クロノスの時間ではなくカイロスの時間をいうとき、永遠の未来は想定されていない。「純粋な手段性の圏域」に属

する「身振り (gesto)」とは、自己と他者の「闘 (soglia)」にとどまることではないだろうか (もっとも、彼自身は「他者」という言葉を意識して使っていないようだ)。

奇しくも「何をしたいわけでもないが、何もしたくないわけではない」というメランコリニストの欲望は、アガンベンがこだわってやまない「A でも not A でもない not not A」という「残余 (resto)」、パウロのいう「残りのもの」と同様の形式をとっている。とすれば、一見とるにたらないような奇妙な欲望——私はそれを現代病と呼んでしまうが——と向き合うことは、意味がないわけではないのではないか。目的志向や主体性が賛美される教育という営為において、締め出されてしまっているもの。私は受動性や偶然性、脱主体化の意義を認めたいと思っている。合理化を追求し、偶然性の排除に躍起になってきた社会に対して、無為という形象の抵抗を。

ここまで、アガンベンの文脈をほとんど離れて言葉遊びに興じてしまったが、私の関心は以上のようなものである。ともあれ、彼が 1987 年に「思考の潜勢力」という論文で提示した「非の潜勢力」(アリストテレスの *dynamis/energeia* の区分に由来する) という概念は、なんであれかまわないものではないだろう。その含意を吟味していく作業を、それ以前の彼の思想に胚胎しているだろうという仮説から、主に初期の著作の検討を通じて行っていくことにする。1977 年に上梓された『スタンツェ』は「怠惰」をめぐる中世の議論から幕を開けるが、潜勢力と「無為 (*imperosità*)」概念との接続も試みたい。彼が紡ぎだしてきた思考について、われわれは思考しないのでないことができるのだ。

研究目的

アガンベンの鮮烈な思想を教育学に反映させる企てはこれまでも期待され、実際の学校教育に適用できることを示した論者もいる (小玉 2013) が、ことさら体系化の難しい彼の思想を落とし込むことは容易ではなく、かといって安易に平板化することも適切ではないだろう。折しも、同一性や当事者性の暴力性を実感させられる出来事があった。今月初め、米国の事件に端を発する人種差別撤廃運動の一環で、黒一色の画像を SNS に投稿する「ブラックアウトチューズデー」が日本でもアスリートを中心に行われた。そんななか、この運動に参加した芸能人が、「あなたには関係がない」という理不尽な非難を浴びたのだ。当たり前だが、誰だって人種差別撤廃を唱えることはできる (してよい)。社会運動においては、アイデンティティや当事者性が暗黙裡に前提されていることが多い。しかし、厳密にアイデンティティを体現している人などいない。なんらかの集団が存在すれば、必ず包摂も排除もされない残余が発生する。

国内でもめっきり多様性の尊重がスローガン化しているが、マジョリティからマイノリティに注がれるまなざしに違和感・不信感を抱く人は少なくないだろう。アガンベンはそういった区分を問いに付す。個性を認めるという話の以前に、人間はなんであれの存在である。國分功一郎のデリダに依拠した議論とも重ねれば、「” それでも ” かまわない」という欺瞞に満ちた寛容から、「” なんであれ ” かまわない」という歓待の精神へ。

先の節で述べた実存に出発点を置く問いに加え、政治思想、教育政治学に紐づいた関心があ

る。これからの教育を構想するうえで、アガンベンを初期の美学、言語哲学に立ち返って検討することは、意味のあることだと思われる。

今後の予定・方針、研究方法

当面は「潜勢力」概念を核として、アガンベンを思想を理解することに努める。そのため、二次文献を適宜参照しながら、アガンベンの初期から中期の著作（『ホモ・サケル』以前）を読解していく。並行して、それらの理解に不可欠と思われるアリストテレスの形而上学や、中世神学、現代の言語哲学の議論、ヘーゲル、ハイデガー、ベンヤミンらの哲学について勉強する。スケジュールとしては、次回の指導会（11/4）までに、参考文献に挙げたアガンベンの著作を通読し、詳細なテーマを設定することを目標にする。

〈通読スケジュール（目安）〉

7月 『中身のない人間』『スタンツェ』

8月 『幼児期と歴史』『言葉と死』

9月 『ホモ・サケル』『思考の潜勢力』（論文の時期に応じて適宜）

10月 予備、熟成期間

参考文献

○アガンベンの著作（出版年は訳書/原書、原書の年次順に記す）

2002 [1970] 『中身のない人間』岡田温司・岡部宗吉・多賀健太郎訳、人文書院。

2008 [1977] 『スタンツェ——西洋文化における言葉とイメージ』ちくま学芸文庫。

2007 [1978] 『幼児期と歴史——経験の破壊と歴史の起源』上村忠男訳、岩波書店。

2009 [1982] 『言葉と死——否定性の場所にかんするゼミナール』上村忠男訳、筑摩書房。

2012 [1990] 『到来する共同体』上村忠男訳、月曜社。

2005 [1993] 「バートルビー 偶然性について」『バートルビー——偶然性について』高桑和巳訳、月曜社。

2003 [1995] 『ホモ・サケル——主権権力と剥き出しの生』高桑和巳訳、以文社。

2000 [1996] 『人権の彼方に——政治哲学ノート』高桑和巳訳、以文社。

2009 [2005] 『思考の潜勢力——論文と講演』高桑和巳訳、月曜社。

○アガンベンに関する著作

上村忠男（2020）『アガンベン《ホモ・サケル》の思想』講談社。

岡田温司（2011）『アガンベン読解』平凡社。

——（2014）『イタリアン・セオリー』中公叢書。

——（2018）『アガンベンの身振り』月曜社。

ゴイレン、エファ（2010）『アガンベン入門』岩崎稔・大澤俊朗訳、岩波書店。

佐々木雄大（2020）「「閥」の構造：アガンベンにおける両義性の概念について」『日本女子大学紀要 人間社会学部』第30号。

高桑和巳（2016）『アガンベンの名を借りて』青弓社。

テッロージ、ロベルト（2019）『イタリアン・セオリーの現在』桂本元彦、平凡社。
原田拓夢（2019）「初期ジョルジョ・アガンベンにおける「言語活動の経験」：一九八〇年代著作におけるインファンティア及び声の概念に着目して」『教育哲学研究』第120号。
マリー、アレックス（2014）『ジョルジョ・アガンベン』高桑和巳訳、青土社。
宮崎寛（2013）「「剥き出しの生」に抗して：アーレントとアガンベンの潜勢力/現勢力」『京都産業大学世界問題研究所紀要』第28号。
『現代思想』第34巻、第7号（2006年6月号 特集＝アガンベン——剥き出しの生）青土社。
。

○その他

アリストテレス（1959）『形而上学 上下』出隆訳、岩波書店。
——（1971）『ニコマコス倫理学 上下』高田三郎訳、岩波書店。
——（2014）「魂について」『新版 アリストテレス全集 第7巻』中畑正志訳、岩波書店。
。
アーレント、ハンナ（1994）『人間の条件』志水速雄訳、ちくま学芸文庫。
——（2015）『精神の生活 上 第一部 思考』佐藤和夫訳、岩波書店。
岩内章太郎（2019）『新しい哲学の教科書 現代実在論入門』講談社。
九鬼周造（1979）『「いき」の構造 他二篇』岩波書店。
——（2012）『偶然性の問題』岩波書店。
國分功一郎（2011）『暇と退屈の倫理学』朝日出版社。
小玉重夫（2013）『学力幻想』筑摩書房。
武田宙也（2014）『フーコーの美学——生と芸術のあいだで』人文書院。
田崎英明（2007）『無能な者たちの共同体』未来社。
ナンシー、ジャン＝リュック（2001）『無為の共同体——哲学を問い直す分有の思考』西谷修・安原伸一朗訳、以文社。
ハイデガー、マルティン（1994）『存在と時間 上下』細谷貞雄訳、ちくま学芸文庫。
ベンヤミン、ヴァルター（1995）『ベンヤミン・コレクション〈1〉近代の意味』浅井健二郎・久保哲司訳、ちくま学芸文庫。
真木悠介（1997）『時間の比較社会学』岩波書店。
——（2008）『自我の起原——愛とエゴイズムの動物社会学』岩波書店。
メルヴィル、ハーマン（2005）「バートルビー」『バートルビー——偶然性について』高桑和巳訳、月曜社。
山森裕毅（2009）「「無能力者」についての研究ノート 九鬼周造の哲学から」『年報人間科学 大阪大学人間科学部社会学・人間学・人類学研究室』第30号。
ランシエール、ジャック（2009）『感性的なもののパルタージュ：美学と政治』梶田裕訳、法政大学出版局。

1 タイトル 「人間の偶然性について」

2 テーマの概要・問題関心

生きている上でいろいろな不幸に見舞われる。毎日誰かしら、突然の交通事故で命を落とす。このような事象には偶然性があるので、起こらないこともできたと言える。（アガンベン 2005）

これは生きている上での話であるが、特に生を受けるタイミングではどうであろうか。例えば、「私は男として生まれないこともできた」という主張は正しいだろうか。あるいは「私は私として生まれないこともできた」「私は彼として生まれることもできた」というような主張は認められるだろうか。

生の受け方を考えるとき、あたかも受ける前の生があるかのように感じられる。それは総体としての生であり、個に宿る生とは別で議論をする必要があるだろう。このように議論を展開するのは木村敏である。（木村敏ほか 2017）前者をゾーエー、後者をビオスとする木村の概念を借りることで、議論の助けになるだろう。

3 研究目的

先に述べたような人間の偶然性がどこまで認められるのかを明らかにするのが本研究の目的である。

その中で木村敏のビオスとゾーエーの概念、あるいはそれを土台とした生命論的差異を利用するので、アガンベンのビオスとゾーエーと比較し、共通項を取り出す。

4 今後の予定・方針

まずアガンベンの説く偶然性に関して、特にその守備範囲や条件について深く読み解く。その上で他の生が関与する偶然性まで拡張できるのかどうかを議論する。

その際に重要となるのが木村敏のビオスとゾーエーの概念であるので、こちらについてもアガンベンのそれとの比較研究を進める。木村敏はケレーニイに影響を受けているので、ケレーニイも対象にしたい。

5 参考文献リスト

ジョルジョ・アガンベン 高桑和巳訳（2005）「バートルビー 偶然性について」月曜社

ジョルジョ・アガンベン 高桑和巳訳（2007）「ホモ・サケル 主権権力と剥き出しの生」以文社

ジョルジョ・アガンベン 上村忠男訳（2015）「到来する共同体」月曜社

上村忠男(2020)「アガンベン 《ホモ・サケル》の思想」講談社

木村敏ほか（2017）「生命と死のあいだ 臨床哲学の諸相」木村敏・野家啓一監修 河合文化

教育研究所

木村敏（2005）「あいだ」筑摩書房

木村敏（1994）「心の病理を考える」岩波書店

荒谷大輔（2018）「ラカンの哲学 哲学の実践としての精神分析」講談社

カールケレーニイ 岡田素之訳（1997）「医神アスクレピオス-生と死をめぐる神話の旅」白水社

カールケレーニイ 岡田素之訳（1997）「ディオニューソス-破壊されざる生の根源像」白水社

小松美彦（1996）「死は共鳴する-脳死・臓器移植の深みへ」勁草書房

小松美彦（2012）「生権力の歴史-脳死・尊厳死・人間の尊厳をめぐる」青土社

1. 概要及び問題関心

現在の学校教育において、不登校や中退、引きこもりといったような教育課程からの逸脱は好ましくない・克服すべきものとして認識されることが多いが、そのような行動には学校という狭い共同体から距離をおき、普段自分を取り巻いている価値観を見つめ直す契機も含まれている。また、そのような逸脱は、学校においてテストなどの成果物として現れてくる遂行性が重視されていることに対して、その遂行性を宙づりにする過程としても見ることができるだろう。本論では、上述のような学校の教育課程からの逸脱をアイデンティティや価値観の再構築という観点から捉え直し、ジュディス・パトラー(1956-)やヴェルナー・ハーマツハー(1948-2017)の遂行性に関する議論などを用いながらその教育的意義について考察したいと考えている。考察を進める上での逸脱の例として、1970年代から80年代のイギリスやアメリカにおいて学校や社会に対して不満を持っていた学生たちによって支持され、当時反社会的だとして批判を受けたヘヴィメタルを扱いたい。

2. 研究目的

個人的な経験として、「学校において何もせず立ち止まっていることは悪である」という価値観に悩まされてきたことがある。この価値観がはっきりと語られるような場面はなかったものの、コツコツと学習を続けることが奨励され、学校行事や部活動において活発に行動している姿が褒められる一方で、部活動や習い事もなく学校の勉強や行事に一生懸命になることもない同級生は、「何かすることを与えなくては」と周りの大人から働きかけられることばかりだった。そのような状況から、半ば強迫的に遂行性を持ち続けようと努力するようになり、今までかなりの息苦しさを感じてきた。教師が遂行性に追い詰められるように(小玉, 2009)、生徒としての私もまた遂行性に追い詰められてきたのだ。このような経験から、学校において語られる息苦しさは遂行性が過剰に求められていることに起因しているのではないかと私は考えている。学校に遂行中断性を取り入れようとする取り組みも見られるが、学校という共同体にこだわるのではなく、学校外に出ていくこととしての遂行中断性も存在すること、またその具体的な例としてヘヴィメタルという文化があることを示すことが本研究の目的となる。

3. 今後の方針と課題

議論の前提となる「教育課程からの逸脱は学校教育側から否定的に受け止められている」という個人としての実感を、どのように学術的に示していくかということが最初の課題だと思う。不登校・中退・引きこもりなどに関する教師などの言説に加え、教育課程からの逸脱を妨げるような教育制度についても検討する必要があるだろう。

また、ヘヴィメタルはいわゆる不良の音楽であった(長谷川, 2010)こともあり、ヘヴィメタル

と教育を繋げるような議論はまだ少ない。その分研究の余地がある領域だとも言えるが、両者の繋がりやそれらを合わせて議論すること自体の意義についても検討すべきだと思われる。さらには、ヘヴィメタルはロックから派生するような形で登場したジャンルであり、その境界線がはっきりと定まっていない部分があるため、双方に関する文化論的研究にも目を通す予定である。

4. 参考文献リスト

ヴァルター・ベンヤミン「暴力批判論」野村修訳『暴力批判論 ヴァルター・ベンヤミン著作集 1』高原宏平・野村修編訳、晶文社、1969 年、7-38 頁。

小玉重夫「教育改革における遂行性と遂行中断性—新しい教育政治学の条件—」『教育学研究』第 76 巻第 4 号、日本教育学会、2009 年、412-423 頁。

小玉重夫『難民と市民の間で ハンナ・アレント『人間の条件』を読み直す』現代書館、2013 年。

ジュディス・バトラー『自分自身を説明すること—倫理的暴力の批判』佐藤嘉幸・清水知子訳、月曜社、2008 年。

ジュディス・バトラー『アセンブリー—行為遂行性・複数性・政治性—』佐藤嘉幸・清水知子訳、青土社、2018 年。

ジュディス・バトラー『分かれ道—ユダヤ性とシオニズム批判』大橋洋一・岸まどか訳、青土社、2019 年。

仲正昌樹『ハンナ・アレント「人間の条件」入門講義』作品社、2014 年。

長谷川修平「1979 年のイギリス社会と若者文化—NWOBHM の時代」『Tsurumi review』第 40 号、鶴見大学英語英文学会、2010 年、85-102 頁。

長谷川修平「ヘヴィメタルと黒い衣服の記号性」『Tsurumi review』第 41 号、鶴見大学英語英文学会、2011 年、51-67 頁。

長谷川修平「ヘヴィメタルにおける悪魔崇拝—ヴェノムの「ブラックメタル」から考える」『Tsurumi review』第 42 号、鶴見大学英語英文学会、2012 年、31-43 頁。

長谷川修平「ヘヴィメタルにおけるミュージシャンとオーディエンスの関係—キャラクター化するアンチヒーローに対する憧れと共感—」『鶴見英語英米文学研究』第 14 号、鶴見大学大学院英米文学専攻、2013 年、1-44 頁。

長谷川修平「ヘヴィメタルにおけるスカル・リング・メメント・モリ、グロテスク、アウトサイダーの意識から考える」『Tsurumi review』第 43 号、鶴見大学英語英文学会、2013 年、7-30 頁。

長谷川修平「ヘヴィメタルにおける動物表象—ドラゴン、ヘビ、オオカミから考える悪の象徴—」『鶴見英語英米文学研究』第 15 号、鶴見大学大学院英米文学専攻、2014 年、1-31 頁。

長谷川修平「ヘヴィメタルにおける動物表象(2)—サソリ、ワシ、コウモリから考えるタブーとカオスの視覚化」『Tsurumi review』第 44 号、鶴見大学英語英文学会、2014 年、15-37 頁。

長谷川修平「メタルミュージシャンの衣装を読む」『鶴見英語英米文学研究』第 18 号、鶴見大学大学院英米文学専攻、2017 年、21-54 頁。

ポール・ウィリス『ハマータウンの野郎ども—学校への反抗・労働への順応』熊沢誠・山田潤訳、筑摩書房、1996年。

安田昌弘「『Popular Music in Theory』再訪—キース・ニーガス氏インタビュー—」『ポピュラー音楽研究』第6巻、日本ポピュラー音楽学会、2002年、51-61頁。

Ambrose Leung and Cheryl Kier, “Music Preferences and Civic Activism of Young People”, *Journal of Youth Studies*, Vol.11 No.4, 2008, pp.445-460.

Maarten Selfhout, Marc Delsing, Tom Bogt and Wim Meeus, “Heavy Metal and Hip-Hop Style Preferences and Externalizing Problem Behavior: A Two-Wave Longitudinal Study”, *Youth & Society*, Vol.39 No.4, 2008, pp.435-452.

Werner Hamacher, “Afformative, Strike”, in Andrew Benjamin and Peter Osborne, *Walter Benjamin’s Philosophy*, London: Routledge, 1994.

Zühal Dinç Altun, Kenan Bülbül and Tuğba Türkkkan, “The Relationship between University Students’ Music Preferences and Drug Abuse Tendencies and Personality Traits”, *Universal Journal of Educational Research*, Vol.6 No.12, 2018, pp.2931-2941.

日本の教育においてなぜスポーツは人間形成の場として重要視されてきたのか

基礎教育学コース 四年 石元悠一

テーマの概要・問題関心

私は、中学高校大学と硬式野球部に所属してきた。部活動を通して、挨拶・返事の徹底やチームスポーツなので、仲間とともに一つの目標に向かって取り組むという社会生活の基本を身につけることができたうえ、練習や試合を通して、自分で考え努力することで自主性が身についた。このように、スポーツを通して人間形成に役立ったと実感している。スポーツ庁の「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」の前文にも「体力や技能の向上を図る目的以外にも、異年齢との交流の中で、生徒同士や生徒と教師等との好ましい人間関係の構築を図ったり、学習意欲の向上や自己肯定感、責任感、連帯感の涵養に資するなど、生徒の多様な学びの場として、教育的意義が大きい。」とあるように、スポーツを通じた人間形成は日本の教育において重要視されている。

一方で、朝日大学硬式野球部の選手がホームレス殺害事件を起こしたり、慶應大学アメフト部では盗撮事件などが起きている。このように、運動部活生による事件は度々生じており、スポーツをすることにより人間形成が成されるのか疑問である。このような疑問があるにもかかわらず、どうして日本では、スポーツと人間形成が結びつけられてきたのだろうか。

研究目的

上述したような問題が運動部員により生じているにもかかわらず、日本の教育においてスポーツは人間形成を行う場として重要な立ち位置にある。このような状況がなぜ生じてしまっているのか、明らかにしたい。

今後の予定・方針・研究方法

部活動と人間形成やスポーツと人間形成、スポーツをやる意義に関する文献を読み、スポーツと人間形成の関係性について理解を深めたい。また、運動部活動の発展してきた歴史の文献も読み、日本の教育においてどのように考えられてきたのかまとめていきたい。

参考文献

- ・ 中澤篤史（2013）学校運動部活動と戦後教育学/体育学「〈教育と社会〉研究」
- ・ 中澤篤史（2011）学校運動部活動の戦後史（上）
- ・ 中澤篤史（2011）学校運動部活動の戦後史（下）
- ・ 文部科学省 運動部活動の意義
- ・ 友添秀則（2009）体育の人間形成論 大修館書店
- ・ 城丸章夫（1980）体育と人格形成－体育における民主主義の追求」青木書店
- ・ 林正邦（1985）スポーツと人間形成について スポーツが個人正確におよぼす影響について

- ・小島一夫（2004）中学校における運動部活動が社会科に及ぼす影響と意義
- ・スポーツ庁 運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン
- ・上野哲（2017）人間性教育における体育系部活動の位置付け
- ・比嘉悟（2017） 未来を拓く“人間力”を育てる－スポーツと教育を貫く芯
- ・永井洋一（2004）スポーツは「良い子」を育てるか 生活人新書
- ・後藤清志 清水正典 梶谷信之 スポーツ選手の人格構造Ⅲ－スポーツと性格形成－
- ・竹之内隆志 田口多恵 奥田愛子（2006） 中学ならびに高校運動選手のパーソナリティ
発達：自我発達を指標とした検討
- ・竹田正樹（2017）競技スポーツ活動の実践が人間性に及ぼす影響
- ・岡出実則（2018）体育科教育特論－体育科における人間形成論
- ・佐藤臣彦（1993） 身体教育を哲学する 東京、北樹出版
- ・山本浩二 荒木祥一 神野賢治（2010） 学校部活動への関わりと社会性獲得との関連性
に関する実証的研究
- ・水内宏（2000）学校教育における「運動部活動」の意義 大修館書店

家庭内情操教育としてのピアノ文化の普及 新中間層の教育熱とヤマハ音楽教室の拡大に焦点を当てて

【章構成（仮）】

はじめに

第1章：戦後日本の都市化とピアノ文化の担い手

第1節：日本の都市化と子供への教育方針の変化

第2節：習い事としてのピアノ

第2章：ピアノ文化の普及と家庭での情操教育の浸透

第1節：ヤマハ音楽教室の誕生と普及

第2節：ピアノを媒介とした情操教育の受容

終章：考察

【問題関心】

戦後日本において、学校教育の場では情操教育と音楽科目が結び付けられて考えていたが、家庭を基盤としての情操教育はピアノと結び付けられて考えられてきた。日本でのピアノは明治初期に欧米から輸入されてから140年ほどの間に瞬く間に大衆化した。特に高度経済成長期には新中間層の台頭とともに我が子への教育に熱を入れる母親が増加したが、彼女たちの多くは子供のお稽古ごととしてピアノを習わせてきた。P・プルデュー(1990)によれば、芸術や楽器を実際に嗜むか否かということは、出身階層に結びついた差異が鮮明に表れるという。中でもピアノは所有し、演奏技術を獲得するために経済力を要するため、楽器の中でも非常に経済的に余裕のある人のみが嗜めるものであり、そのような状態を指して、ピアノは貴族的な楽器と比喻されることもあった。しかし高度経済成長期になり、ピアノの販売価格の低下があったものの依然として所有が容易ではなかった時代に、ピアノは広く大衆化した。前間・岩野(2000)によると「狭い団地の一室にピアノが競って置かれ」とある。大衆化にはヤマハ音楽教室が打ち出した情操教育の存在が関わっていたと考えられているが、価格が高く場所もとるピアノはなぜそれほどまでに大衆の心をとらえるようになったのか。本論文では高度経済成長期の新中間層の母親を切口しながら、ピアノ文化やヤマハ音楽教室が当時どのような意味を持っていたか、そしてピアノを通して情操教育への欲求がどのように組織されたかを明らかにしたい。

【研究目的】

日本におけるピアノ文化がどのように情操教育と結びつき浸透したかを明らかにするためである。日本においてピアノに関する研究は、多くが演奏技法や特定の曲に対する評価に偏っており、社会学的見地からピアノ文化を研究したものは多くない。社会学的にピアノ文化を

考察した代表的なものとして水野（2001）は音楽教室の存在がピアノ文化を大衆化させたところがあるが、その理由までは研究していない。そのため当時のピアノを通して情操教育への欲求がどのように組織されたかを当時の文献から考察していく。

【今後の予定】

国立国会図書館が抽選予約制になったため、まずは現在手に入る川上源一の『音楽普及の思想』に目を通し、家庭内情操教育概念の萌芽と普及に関わる箇所を精読する。次に増井の「データ・音楽・にっぽん」を軸として、ヤマハ音楽教室誕生後のピアノ教育について理解を深めていきたい。

【参考文献】

- ・ Bourdieu, Pierre 1979, *La Distinction: Critique Social du Judgement*, Edition de Minuit.=1990 石井洋二郎訳 『ディスタンクシオン：社会的判断力批判（Ⅰ，Ⅱ）』藤原書店
- ・ 増井敬二編, 1980, 「データ・音楽・にっぽん」民主音楽協会民音音楽資料館
- ・ 秋山雄一, 1991, 「文化のヒエラルキーと教育の機能」, 宮島・藤田英典編『文化と社会』有信堂高文社
- ・ 有末賢, 1999, 「民衆の生活世界—都市民族と都市文化—」, 藤田弘夫, 吉原直樹編『都市社会学』有斐閣
- ・ 青木貞茂, 2008, 「文化の力 カルチュラルマーケティングの方法」NTT 出版
- ・ 池田松洋, 1966, 「ピアノ音楽の教育的意義」
- ・ 稲垣恭子, 2007, 「女学校と女学生 教養・たしなみ・モダン文化」中公新書
- ・ 植松治子, 住吉玲子, 小島洋子, 1960, 「入園長所から見た母親の教育観」日本保育学会第十三回大会特集号
- ・ 川上源一, 1986, 「新・音楽普及の思想」ヤマハ音楽振興会
- ・ 川上源一, 1977, 「音楽普及の思想」ヤマハ音楽振興会
- ・ 川上源一, 1981, 「子どもに学ぶ—親と教師のために—」三池書房
- ・ 高橋一郎, 2001, 「家庭と階級文化—中流文化としてのピアノをめぐる—」柴野昌山編『文化伝達の社会学』
- ・ 鶴橋泰二, 1935, 「趣味大観」趣味の人社
- ・ 長藤清子, 田島栄文, 2010, 「昭和初期における娯楽・旅行費の家計支出」甲子園短期大学紀要 No.28
- ・ 西原稔, 1995, 「ピアノの誕生」講談社
- ・ 二関隆美, 菊池城司, 中村清, 岩崎寿子, 1967, 「母親の教育意識」日本教育社会学会大会
- ・ 畑山千恵子, 1989, 「日本の音楽文化を考える—子供のピアノ教育をめぐる—」
- ・ 前間孝則, 岩野裕一, 2000, 「日本のピアノ 100 年」草思社
- ・ 水野宏美, 2001, 『近代の家族社会とピアノ文化』, 三田哲学会編集委員会『哲学』106 集 三田哲学会
- ・ 東京音楽学校【編】, 1987, 「東京芸術音楽百年史」, 音楽之友社

研究テーマ

生きづらさからの解放としての創作・アート

問題意識・関心・背景

私はストリートダンスをやっており、ただ言われた振り付けを踊るだけでなく、自分が創作する立場になったときに、「そもそもお客さんが感じる『カッコいい』や『面白い』とはいったい何なのだろうか?」という致命的な疑問にぶつかった。転じて、「自分たちの提示する表現とその解釈についての乖離はあるとして、どのようにすれば表現の意図が伝わるのだろうか? 観測者からはどのように視えていて、感情を喚起させるために必要な要素、構造はいかにして表現に乗っかってくるのか?」といった諸課題について考え、そのうえで「みんなで踊る」こと、「一人で踊ること」の意義から毎回の演目においてコンセプトや新たな問いを立て、そこを出発点としてダンスの創作をしてきた経験がある。

このプロセスが、前提を疑い新たな問いを立てることを本質とするアートの思考に近いと気づき芸術の分野に興味を持った。また人間の「創造性」や「問いを立てる力」、「意味の表象」が、科学技術が発達し、問題解決はコンピュータが行ってくれる時代においてはさらに重要になってくるのではないかと考えた、が、さして自分にとっては重要ではない。

まず、アート・芸術の「創造性」にフォーカスを当て、それはどのように養われ、かたちとしてどのように表れてくるのかを知りたいと思った。Science, Technology, Engineering, Mathematics を統合した STEM 教育は 2000 年代ごろからアメリカを中心に議論されてきた。これに Art を追加した STEAM 教育の必要性を説いたのが 2006 年、ヤークマン(Yakman, G.) である。以下にヤークマンの示したフレームワークを示しておく(図 1)。私もこれに興味を示した。STEM の理数系はその特徴上、1 つの解決策を目指していくような収束的思考(convergent thinking)になりがちであるが、ここに Art の特徴である拡散的思考(divergent thinking)を組み合わせ、学際的な視点をもつことで創造的で広がりのある思考を身に着けることを意図されている。

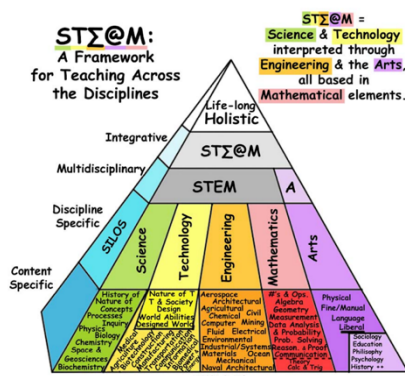


図 1. Yakman による STEAM 教育のフレームワーク
(出典 Yakman 2008)

以上のような関心を持ったが、実際に各国の STEAM 教育や日本の美術教育についてただ調べていくことに面白みは感じない。また卒業論文において、この分野で新奇性のある説を打ち出すことや広がりを持ったことを述べられる自信はない。そこで、独自性を出すために創作の結果などに焦点を当てるのではなく、その動機やきっかけについて焦点を当ててみたい。

『生きづらさからの解放としての創作・アート』とでも大胆に言ってみる。

なぜこう銘打ったか。元々、私は鬱病を患い、所謂、“生きづらさ”を抱え、人間という存在、自己という存在を知りたくて教育や哲学の勉強を始めた。また、自分がダンスをやっていた動機も自分の考えの型写しともいえる作品を作ることによって自分の意義を示したいといった強い思いがあった。そのため鬱でドロップアウトし、休養の後（今振り返れば半ば無理やり）復帰したのもこの名状しがたい思いが強かったためであろう。その経験もあり、自分の生きづらさを起点とした創作の過程における自己の解放の可能性について哲学的な視点を絡めて考えたいと強く思った。

例えば、「障害者アート」という分野がある。勝手な考察であるが、自分の不全さからくる自己の圧力の高まりともいえるなにかを、なにかしらの形でこの世界に示す過程とも考えられるのではないだろうか。また、私の好きなストリートダンスに引き付けて語らせていただく。ストリートダンスのジャンルの1つである Locking は、よく男性アイドルグループのダンスに取り入れられているが、実際、そのルーツとして黒人の人種差別・抑圧、奴隷制度からの解放という側面がある。ストリートダンスにはある種単語のような決まった動きがあり、それぞれにルーツがある。具体的な動きで例を挙げると、看守が鍵束を回す動きを牢の中から眺めていた奴隷たちは、その動きをダンスの中に取り入れ共通言語にしていたとされている。また他の決まった動きの名前に Black Power や Unity(黒人同士の結束)といったものもある。そういった、生きづらさともいえる外側への圧力をアート・創作の領域に「生きづらさ」という一つの共通した線をみいだすこともできるかもしれないと考えている。そのアートに限らず、創作への昇華による人間形成の一面を探れたらと考えている。

研究目的

私たちの存在の苦しみからの解放を創作に見る。美術教育などの意義を利用可能性から探るのではなく人間の心身の体験に根差し意義を探る。生きる苦しみや生きる意味の創作を通じた昇華のプロセスを明らかにする。

研究方法

表現者や当事者の声が必要になってくると考えていたが、この情勢において対面で行うことは研究を安定的に進めるためにはあまり望ましくない。芸術や心身に絡んだ思想を前提としてその批評、自説の展開にとどめておいた方が良いのかもしれない。浅学であり研究方法がわかっていないため未定である。

哲学的な概念の応用から始まり、出来れば臨床心理的な視点を取り入れることができればと考えている。

今後の方向性

先行研究をさらに調べ、アート思考に関する基礎知識を深め、研究の意義を明確化する。

小学校中学校の現場においてはどのようなカリキュラムや意識をもって芸術の教育が行われているのかを調べる。

研究を具体的に作る作業。ターゲットを絞る。分野(身体表現、描画、音楽)を決定する。研究の内容を広く浅くでなく、さらにニッチで鋭くする。

4. 障害者アートなど周辺の思想を調べる。

参考文献(予定のものも含む)

胸組虎胤「STEM 教育と STEAM 教育 ——歴史, 定義, 学問分野統合——」『鳴門教育大学研究紀要』第 34 巻、2019 年 3 月、58-72 頁

e.g. Yakman, Georgette. "What is the point of STE@M? - A Brief Overview." Steam: A Framework for Teaching Across the Disciplines. STEAM Education 7 (2010).

小松佳代子 『美術教育の可能性 作品制作と芸術的省察』 勁草書房, 2018

鷲田清一 『〈想像〉のレッスン』 ちくま文庫, 2005

末永幸歩 『13 歳からのアート思考』, ダイヤモンド社, 2020

秋元雄史 『アート思考』, プレジデント社, 2020

高木紀久子, 岡田猛, and 横地早和子「美術家の作品コンセプトの生成過程に関するケーススタディ」 認知科学 20.1 2013 年, 59-78 頁

岡田猛, 横地早和子, 難波久美子, 石橋健太郎, & 植田一博. (2007). 「現代美術の創作における「ずらし」のプロセスと創作ビジョン」. 認知科学, 14(3), 303-321 頁

山口周 『世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるのか?』 光文社新書, 2017

東畑開人 『美と深層心理学』, 京都大学学術出版会 2012

齊藤環, 與那覇潤 『心を病んだらいけないの?』 新潮選書, 2020

ネルソン・グッドマン 『世界制作の方法』 菅野盾樹訳 ちくま学芸文庫, 2008

ネルソン・グッドマン 『芸術の言語』 戸澤義夫・松永伸司訳 慶應義塾大学出版会, 1968

リチャード・ウォルハイム 『芸術とその対象』 松尾大訳 慶應義塾大学出版会, 2020

ヴィクトール・E・フランクフル 『夜と霧 新版』 池田香代子訳 みすず書房, 2002

キーワード：芸術, アート, 創造性, STEAM 教育

仮題：動画サイトの誕生で映像メディアによる集合的記憶の形成はいかに変化するのか

テーマの概要、問題関心

アルヴァックスによると、全ての記憶というのは社会的に編成されるものであり、純粋に個人的な記憶というものは存在せず集合的記憶として存在している。つまり、自分が一員となっている集団の刺激から集合的記憶が想起されやすくなっている。そこで時代の変化によって社会の構造が変われば自分の存在する集団も変わるため、集合的記憶の形成のされ方が変わると考えられる。

そもそも集合的記憶は、他者とのコミュニケーションや、自分の接するメディア、実際に足を運んだ博物館や記念館などによって形成されるが、本論文ではテレビ放送と動画サイトに絞って論じたいと思う。その理由は大きく分けて二つあり、一つ目は、映像メディアに現代社会が影響を受けやすいと考えるからである。映像メディアは実際に足を運ぶことができない現地の博物館や記念碑を直接見ることができなくても、視覚情報としてとらえることができる。また、過ぎ去った過去の出来事でも同様に繰り返し強く想起させることができ、その結果東日本大震災の津波の映像などは今でも、公共の電波を使って流すときには考慮が必要な程である。我々の生活の中でもテレビのニュースや YouTube から情報を得ようとする人が多いのは明らかである。二つ目は、映像メディアを取り巻く環境が速いペースで変わっているからである。映像メディアは現在大きな変革を遂げている。インターネット発達以前は、映像メディアといえばテレビであり、限られた数のテレビ局が放送する番組を視聴する形が一般的であったが、インターネットの発達により、現在では誰もが映像の発信者になり、受け手も選択肢が多様に存在する状況にある。動画サイトが映像メディアと我々の関係性をより個別的へと変化させた中で、集合的記憶の形成にどのような変化を与えたのかを探りたい。

研究目的

我々を取り巻く映像メディアの環境は凄まじい勢いで進化しており、インターネット経由の動画サイトで情報を得ることが当たり前になっている。変化によって社会構造が大きく変わっているのを多くの人が実感している中でその変化は社会にどのような影響をもたらしているのかを集合的記憶の形成という視点から見るのが目的である。

今後の研究方針

まず集合的記憶についての理解を深める。記憶を社会学的な立場で考察できるように、アルヴァックスの『集合的記憶』などの文献を読み込む。その上で、映像メディアと集合的記憶の形成の関係性について考察できるように様々な文献を探る。特にメディア学の基本を押さえたうえで最近の論文を読みことで最新の情報を理解できるようにする。

参考文献（予定）

- M.アルヴァックス 小関藤一郎訳 1989『集合的記憶』 行路社
- 森村敏己 荒又美陽 2006『視覚表象と集合的記憶』 旬報社
- 金瑛 2012『集合的記憶概念の再考：アルヴァックスの再評価をめぐって』フォーラム現代社会学
- 金 瑛 2010『アルヴァックスの集合的記憶論における過去の実在性』 ソシオロギス
- 金 瑛 2011『集合的記憶と空間--アルヴァックスとトポグラフィー』 社会システム研究
- 大野 道邦 2000『記憶の社会学--アルヴァックスの集合的記憶論をめぐって』 神戸大学文学部紀要
- 翁川 景子 2006『記憶の共有可能性--M.アルヴァックスにおける集合的記憶論の再構成』 ソシオロジスト
- 翁川 景子 2004『M.アルヴァックス「集合的記憶論」再検討への視座--<記憶という行為>の観点から』 現代社会理論研究
- 辻泰明 2016『映像メディア論：映画からテレビへ、そして、インターネットへ』 和泉書院
- 原田健一 2019『戦時・占領期における映像の生成と反復：メディアの生み出す社会的記憶』 知泉書館
- 佐藤 翔輔，邑本 俊亮，新国 佳祐，今村 文彦 2019『震災体験の「語り」が生理・心理・記憶に及ぼす影響：語り部本人・弟子・映像・音声・テキストの違いに着目した実験的研究』 地域安全学会論文集
- 酒井 真由子，加藤 隆雄 2017『テレビと視聴者の物語共同体：少年事件報道のマルチモダリティ分析を通じて』 紀要 上田女子短期大学附属図書館・紀要委員会 編
- 高橋 徹 2009『想起と忘却--マスメディアと文化に関する予備的考察』 情報科学
- 岡嶋 裕史 2018『Web から SNS へ ―情報発信構造の変遷―』 情報の科学と技術
- 吉見俊哉『メディア文化論 改訂版 メディアを学ぶ人のための 15 話』2012 有斐閣
- 水越伸『メディア論』2018 放送大学教育振興会
- 佐藤卓己『現代メディア史』2018 岩波書店

【研究テーマ案】

障害者とヘルパーが関わり方を習得するプロセス

【テーマ概要・問題関心】

相模原障害者殺傷事件から四年が経過しようとしている。犯人の手記や手紙を分析すると、彼は「役に立たなければならない」と自分にも他者にも強く求め、「役に立たない」障害者は殺すべきだという主張に至っている。

理解しがたい他者を自分の価値観で評価する姿勢は決して彼だけのものではない。自分と異なる他者への無知は、他者に対する攻撃へと転化する可能性を常にはらんでいる。障害者差別以外でも、外国人差別や病人差別、性的マイノリティへの差別、社会階層にまつわる問題など、頻繁に見られることだ。「あの子、ああいう子らしいよ」という陰口もまた、異なる他者への無知が攻撃に転化した一つの例である。

異なる他者への無知が攻撃に転化するのとは、異なる他者との関わり方を知らないからではないか。ここで私は「他者を分かれよう」と主張するつもりはない。他者はすべて自分と異なる存在であり、他者を完全に理解することはできない。私たちは「あたりまえ」や「常識」を共有する人々という「世間」の存在を信じていて、「分かり合える（と思える）範囲」でのコミュニケーションを通して、分かっているふりをしているだけだ。私が提案したいのは、分からない他者との「関わり方を習得するプロセス」を知れば、無知が攻撃に転化することを避けられるのではないかとということである。

以上のような問題意識から、「障害者とヘルパーが関わり方を習得するプロセス」を明らかにしたいと考える。ここでこの両者の関係に注目するのは、二人の人間の関係として分かりやすく、かつお互いの「分からなさ」もやはり大きいからである。この両者がお互いに「分からなさ」を乗り越え、完全に分かり合えないけれども適切な関わり方を学ぶ過程を定式化できれば、障害に関係なく、自分と異なる全ての他者を対象として、無知から攻撃へと転化する事態を避けることのヒントとなるのではないかと考えている。

【研究目的】

ヘルパーと障害者がお互いに「分からなさ」を乗り越え、関わり方を学ぶ過程を定式化することによって、障害に関係なく、自分と異なる全ての他者を対象として、無知から攻撃へと転化する事態を避けることのヒントを明らかにする。

【予定している研究方法】

障害者/ヘルパー両者へのインタビュー、もしくは私自身がヘルパーとして経験した事例研究インタビューする場合の対象者のめどは立っているが、許可はとっていない状況。

【現在予定している参考文献】

＊他者理解やコミュニケーションに関して

- Blumer,H.(1969) Symbolic Interactionism: Perspective and Method. New Jersey, Prentice-Hall, Inc.
(後藤将之 [訳] (1991)『シンボリック相互作用論-パースペクティブと方法』勁草書房)
- Edgar H. Schein (2009) HELPING:How to Offer,Give,and Receive Help. Oakland, Berrett-Koehler Publishers. (金井壽宏、金井真弓 [訳] (2009)『人を助けるとはどういうことか 本当の「協力関係」をつくる7つの原則』英知出版)
- 石川 ひろの・奥原 剛ら (2017)「系統看護学講座 基礎分野 人間関係論」医学書院
- 大坊郁夫 (1998)『しぐさのコミュニケーション-人は親しみをどう伝えあうか』サイエンス社
- 大坊郁夫 (2001)「対人コミュニケーションの社会性」『対人社会心理学研究』1, pp.1-16
- 高石宏輔 (2015)『あなたは、なぜ、つながれないのか ラポールと身体知』春秋社
- 對馬洋一郎、安尾真美 (2018)『ちょっとしたことでうまくいく発達障害の人が会社の人間関係で困らないための本』翔泳社
- 和田信明・中田豊一 (2010)『途上国の人々との話し方 国際協力メタファシリテーションの手法』みずのわ出版

＊ケアの場面におけるコミュニケーションの捉え方に関して

- Arthur W. Frank (1995) The Wounded Storyteller. Chicago, The University of Chicago Press. (鈴木智之 [訳] (2002)『傷ついた物語の語り手 身体・病い・倫理』ゆみる出版)
- 浜渦辰二編 (2005)『ケアの人間学入門』知泉書館
- 石川准 (2004)『見えないものと見えるもの 社交とアシストの障害学』医学書院
- 磯崎祐介 (2014)「当事者が描く生きづらさ」大塚類・遠藤野ゆり編『エピソード教育臨床—生きづらさを描く質的研究』創元社
- 伊藤亜紗 (2015)『目の見えない人は世界をどう見ているのか』光文社新書
- 伊藤亜紗 (2019)『記憶する身体』春秋社
- 伊藤亜紗 (2020) 「コミュニケーションと輪郭」. 『群像』, 75(2), pp. 283-293.
- 岩崎香 (2019)『障害ピアサポート 多様な障害者領域の歴史と今後の展望』中央法規出版
- 春日武彦 (2001)『病んだ家族、散乱した室内 援助者にとっての不全感と困惑について』医学書院
- 西村ユミ (2001)『語りかける身体—看護ケアの現象学』ゆみる出版
- 西村ユミ (2007)『交流する身体—〈ケア〉を捉えなおす』日本放送出版協会
- 西村ユミ、榊原哲也 (2017)『ケアの実践とは何か 現象学からの質的研究アプローチ』ナカニシヤ出版
- 大塚類 (2009)『施設で暮らす子どもたちの成長——他者と共に生きることへの現象学的まなざし』東京大学出版会
- 大塚類、遠藤野ゆり編著 (2014)『エピソード教育臨床』創元社
- 大塚類 (2020)「＜最たる超越＞としての他者—フッサールの思索に基づく他者理解の捉え直し—」『教育哲学研究』第 118 号, pp.117 - 123

榊原哲也(2018)『医療ケアを問いなおす 患者をトータルにみることの現象学』ちくま新書
柴崎美穂(2017)『中途盲ろう者のコミュニケーション変容 人生の途上で「光」と「音」を失っていった人たちとの語り』明石書店
東畑開人(2019)『居るのはつらいよ ケアとセラピーについての覚書』医学書院
渡辺一史(2003)『こんな夜更けにバナナかよ 筋ジス・鹿野靖明とボランティアたち』北海道新聞社
横山恵子・葎山正子(2017)『精神障がいのある親に育てられた子どもの語り 困難の理解とリカバリーへの支援』明石書店

＊その他、差別や障害に関して

嶺重慎、広瀬浩二郎、村田淳(2019)『知のスイッチ 「障害」からはじまるリベラルアーツ』岩波書店
村上靖彦(2008)『自閉症の現象学』勁草書店
斎藤環、与那覇潤(2020)『心を病んだらいけないの？—うつ病社会の処方箋—』新潮社
高谷清(2011)『重い障害を生きるということ』岩波書店
綿野恵太(2019)『「差別はいけない」とみんないうけれど。』平凡社

＊研究方法に関して

桜井厚、小林多寿子(2005)『ライフストーリー・インタビュー—質的研究入門』せりか書房

1.ディズニープリンセスの居場所の変遷からみる女性が居場所を変える意義について

2.テーマの概要や問題関心、研究目的

ディズニー作品は社会の情勢を反映して作られることが多い。『ズートピア』(2016)は、草食動物で夢を追いかけるウサギのジュディと肉食動物で夢を忘れたキツネのニックがある事件を解決する、という物語である。物語中では事件を解決する中で、ジュディが肉食動物に原因があるという偏見を持ってしまうなど、無意識的な差別が表現されていた。実写版『アラジン』(2019)は、泥棒であったが魔法のランプの力で王子に成りすましたアラジンと王女ジャスミンの恋愛物語である。人一倍国のことを考えていたジャスミンは女性だという理由で国を束ねることを許されず、窮屈な思いをしていた。その思いを歌った『speechless』はアニメ版にはないもので大変話題になった。そうした中でも特に話題になっていたのは次々と作られた続編の結末だ。『アナと雪の女王』の続編である『アナと雪の女王 2』(2019)では、アレンデル王国で仲良く暮らしていた姉妹のエルサとアナが、エルサの意思や生い立ちにより離れ離れに暮らす道を選ぶことになる。また『シュガーラッシュ』の続編である『シュガーラッシュ・オンライン』(2018)では、主人公であるラルフとヴァネロペが単調な生活をしてながらも同じ環境で仲良く暮らしていたが、ヴァネロペがより刺激がある環境を求めたが故に異なる環境で暮らすことになった。

このように 2010 年代のディズニー作品では、元々いた場所からの旅立ち、元々一緒にいた人との別離など主人公の環境を変えることが結末として使われることが多くなったように思われる。このようなことを受けて、ディズニープリンセスに焦点を絞り、主人公が環境を変えること理由や是非、環境を変えることでディズニープリンセス自身にどのような変化が起こったのか、その時代背景、ディズニー作品でこれらを取り上げることがどのような意味を持つのかということに興味をもった。論文内ではディズニープリンセスと同世代の若い女性(10代~20代)が元々慣れていた環境を変えることが本人にとってどのような意味をもつのかということを中心に考えていきたい。

3. (今後の予定・方針、研究の方法)

各ディズニープリンセスについて物語中での居場所の変遷についてまとめ、時代背景や理由、ディズニープリンセス自身の変化について調べていく。その中で『シュガーラッシュ・オンライン』や『アナと雪の女王 2』のように女性が自らの意思で環境を変える、自律するというメッセージが明確に打ち出されるようになったのがいつ頃からなのかを考察していきたい。居場所論やジェンダー論を背景に、2010 年代のプリンセスがプリンセス像を打ち破り自分の環境を変える意味とその作品が伝えるメッセージについても読み解いていく。論文内で扱うプリンセスは以下の通りである。(『シュガーラッシュ・オンライン』中でディズニー

プリンセスが全員集まるシーンがあるため、そこで登場するキャラクターを対象としている。)

プリンセス名	作品名	公開年
白雪姫	白雪姫	1937
シンデレラ	シンデレラ	1950
オーロラ姫	眠れる森の美女	1959
アリエル	リトル・マーメイド	1989
ベル	美女と野獣	1991
ジャスミン	アラジン	1992
ポカホンタス	ポカホンタス	1995
ムーラン	ムーラン	1998
ティアナ	プリンセスと魔法のキス	2009
ラプンツェル	塔の上のラプンツェル	2010
ヴァネロペ	シュガーラッシュ	2012
メリダ	メリダとおそろしの森	2012
アナ、エルサ	アナと雪の女王	2013
モアナ	モアナと伝説の海	2016

4.参考文献

- ・阿部真大(2011)『居場所の社会学—生きづらさを超えて』.日本経済新聞出版.p231
- ・石本雄真(2010)「こころの居場所としての個人的居場所と社会的居場所—精神的健康および本来感,自己有用感との関連から—」『カウンセリング研究』43.pp72-78
- ・上瀬由美子、佐々木優子(2016)「ディズニープリンセス映画にみるジェンダー表現の変容—プリンセスの作動性に注目した量的分析—」『立正大学心理学研究年報』7.pp13-23
- ・萩上チキ(2014)『ディズニープリンセスと幸せの法則』.東京.星海社.p259
- ・川村明日香(2019)「東京ディズニーリゾート 35 周年を考える」『言語文化共同研究プロジェクト』 pp31-42
- ・川村明日香(2018)「ディズニー版『白雪姫』のりんごをめぐる物語の変容:「毒」から「かわいい」への変遷」『表象と文化』2017.pp2-32
- ・近藤龍司、土肥真人、柴田久(1998).「東京ディズニーランドにみる日常から非日常への心理的变化と環境の相互関係の研究」『ランドスケープ研究』62(5).pp669-672
- ・重橋のぞみ、伊藤美希(2020)「大学生の居場所における「本当の自分」と「仮面の自分」のイメージと居場所感の関連:キャラの受けとめの観点から」『福岡女学院大学紀要・人間関係学部編』21.pp73-81
- ・芝崎美和、吉村淳子(2015)「青年期における居場所意識とレジリエンスとの関連:女子大学生を対象とした検討〈研究論文〉」『幼年教育研究年報』37.pp91-98
- ・杉本希映、庄司一子(2006).「「居場所」の心理的機能の構造とその発達的变化」『教育心理

学研究』 54.pp289-299

・高橋晶子、米川勉(2008)「青年期における「居場所」の研究」『福岡女学院大学大学院人文科学研究科紀要』 5.pp57-66

・田中柊子(2015).「『アナと雪の女王』における幸福」『静岡大学情報学研究』 20.pp96-112

・照沼かほる(2011)「女の子はみんなプリンセス：ディズニー・プリンセスのゆくえ」『行政社会論集』 23(4).pp41-84

・照沼かほる(2012)「ラプンツェルの「冒険」：ディズニー・プリンセスのゆくえ 2」『行政社会論集』 24(4).pp59-92

・照沼かほる(2020)「キャラ化するプリンセスたち：ディズニー・プリンセスのゆくえ 3」『行政社会論集』 32(3).pp127-160

中島喜代子、廣出円、小長井明美「「居場所」概念の検討」『三重大学教育学部研究紀要.自然科学・社会科学・教育科学』 58.pp77-97

・平岡緋奈子(2018)「ディズニープリンセス映画に見る言語的ジェンダー表現」『金沢大学人間社会学域経済学類社会言語学演習 [編]』 13.pp97-111

・藤竹暁(2000)『現代人の居場所（生活文化シリーズ（3））』.至文堂.p256

・藤原靖浩 (2010)「居場所の定義についての研究」『教育学論究』 2.pp 169-177

・舞、さつき (2018).「動物たちの"unconscious bias": ディズニー映画『ズートピア』から」『言語文化共同研究プロジェクト』 pp45-52

・丸山松彦(2012).「『トイ・ストーリー』におけるキャラクターのアイデンティティについて」『玉川大学芸術学部研究紀要』 4.pp13-24

・本橋哲也(2016)『ディズニー・プリンセスのゆくえ：白雪姫からマレフィセントまで』.京都.ナカニシヤ出版.p190

・森本翔子(2015)「ディズニー長編アニメーション作品におけるプリンセス像」『表現文化』 8.pp67-82

・柳生すみまろ(2004)『ディズニープリンセスの秘密：永遠の乙女たち』.東京.講談社.p95

・李修京、高橋理美 (2011).「ディズニー映画のプリンセス物語に関する考察」『東京学芸大学紀要.人文社会学系. I』 62.pp87-122

・若桑みどり(2003)『お姫様とジェンダーアニメで学ぶ男と女のジェンダー入門』 筑摩書房.p206

1. 名前、タイトル（取り扱う予定のテーマ）

大テーマ：日本における Deschooling 論の受容と展開

テーマ：高度経済成長に成立した、学校化社会以降の学校批判言説のあり様とは

卒論タイトル：山本哲士によるイヴァン・イリイチの「脱学校論」解釈

教育学部基礎教育学コース 4 年 09-191109

小川護央

2. テーマの概要や問題関心

概要：

1970 年代は日本において学校化社会が定着した年代であるとされている。例として、1950 年代後半から増加傾向にあった高校進学率は 1970 年代半ばには 90% を超え、50 年代から約 40 ポイントもの伸びをみせた。このように学校の社会的プレゼンスが高まる中で、近代学校システムに対しての批判論が立ち上がっていた。世界的に見れば、学校批判論と言える Deschooling 論は、その先駆けと言える 1920 年代の学校死滅論にまで遡り、その後ライマー(Reimer.E)やリスター(I.Lister)など多様な学者によって打ち出された。その中でも 1977 年に日本で訳本が刊行されたイヴァン・イリイチの『脱学校の社会』は、木村(2015)によれば、日本において近代学校システム批判への転換を導いたとされている。

本研究では、イリイチの議論の日本における受容とその影響の一端を解き明かす。具体的には、イリイチに直接師事し、多数の著作を残している山本哲士によるイリイチ解釈、特に脱学校論に対しての解釈に焦点を当てる。手法としては、史学研究の枠組みのなか、史料分析とインタビューを組み合わせ、オーラル・ヒストリー研究の形を取ることを考えている。

問題関心：

COVID-19 が社会を大きく変える中で、学校という空間・システムを問い直す議論はまた新たな高まりを見せている。「学校の新たな生活様式」の模索や、オンライン授業を余儀なくされたことで、集団で登校し同じ空間を共有することの意義が再確認されるとともに、単なる知識伝達における学校教員の存在意義が改めて問い直されてもいる。また、授業が遅れた結果として生まれた進度の遅れを取り戻すことが急務となっている現状においては、学校教育の本来的目的といったものが阻害されているのではないかというような批判も存在している。最近になって、学校生活が少しずつ取り戻されつつあるのは事実ではあるが、しかし事実として学校に行きたくないというような声を上げる子供達が増えているというニュースも存在している。

また何より、自粛期間中にそれぞれの人間はどの程度自律的に考え、自律的に判断し、自律的に行動した、と言うふうに見えるだろうか。確かに専門的な知識には乏しいかもしれないが、多くの人間は政府からの要望に対して思考停止的に自粛を選択した、またはそうせざるをえなかったのではないだろうか。それに加えて、自粛警察と呼ばれるように、自粛しな

い人間に対しては排他的かつ暴力的に非難する人間のありようも浮かび上がっている。これはまさしくイリイチが脱学校の社会において指摘したような「制度信仰」による人間の他律的なありよう、そしてその悪しき側面が現出した形に他ならないのではないだろうか。この点から、今この時にイリイチの脱学校論に着目することには意義があるのではないだろうかと考えている。社会構造の変化に際して、既存のシステムに対しての主として批判的なまなざしはその存在感を増すものであろう。その点で、学校化社会が進展する中での学校批判に類する言説に対しての反応は、現代における学校の「相対化」という反省的行為そのものを省みる上での1つの題材だろう。また、敷衍して、社会変容に伴う学校批判が巻き上がる現在の社会を考え直す上での、反省点を見出し得るのではないだろうか。

次に、なぜ山本哲士に着目するのかに触れる必要があるだろう。その理由は彼自身が単なる翻訳などを通じてイリイチに触れたのではなく、実際に彼自身イリイチに出会って彼の薫陶を受け、大きく影響を受けた人間であるからということがあげられる。ここにおいて書物からの理解に留まったであろう、多くの日本の教育学者とは一線を画す点があるのではないか、というふうに考え、当時彼のみが捉えられていたものを発見することができるのではないかという期待があるためである。

3. 研究目的

2020年現在も近代学校システム批判は、学者に限らず多様な人間からなされているが、その批判言説の日本における端緒としてイリイチの脱学校論を捉え、その受容過程の一端を解き明かす。具体的には、山本哲士という人間が、他の当時の教育学者と比較してイリイチの思想の何を捉え評価し、何を見落としたのか。そして可能であれば、彼の解釈は、日本の教育界における Deschooling 論にどのような影響を与え、彼の解釈の何が評価され、何が見落とされたのかを捉えたい。

4. 今後の予定・方針、研究の方法

■今後の方針

1. 確実に行うこと

- ・ 山本哲士の文献の発掘（継続的には行うものの、基本的には8月までにはリストを作成できれば望ましい）

- ・ 山本哲士の著作に関する読み込み（8・9月までをめど）

2. 展開の選択肢として

- ・ 山本の著作の中での比較検討に加え、インタビューでの記述との比較検討

- ・ 何かしらの時代を絞り、山本のイリイチ解釈と他の教育学者の解釈との比較検討

■研究方法

史料分析を軸に据え、あくまで教育史学の射程の中で研究を進めたい。オーラル・ヒストリーという形で、口述記録の検討も研究手法の1つとして捉えることを検討しており、この点でインタビューという形式も検討している。

■懸念点

・そもそも、山本哲士という学者をどのように捉えて読んでいけばいいのかが不明である。彼のどういった点に対して注意しながら文献を読み進めていけばいいのか、その前提を構築できていない。故に、何が重要な文献と言えるのかがわからずにいる。

・ここからさらに研究対象を絞る上での論点の設定の方針や、絞り込み方の見通しがイメージできていない。

5. 参考文献候補リスト

■前提としてイリイチの思想を掴む

イヴァン・イリイチ『脱学校の社会』、東京創元社、1977年

イヴァン・イリイチ『人類の希望-イリイチ日本で語る』、新評論、1984年

今井康雄[編]『教育思想史』、有斐閣、2009年

見田宗介[編/著]『縮刷版 社会学文献事典』、弘文堂、2014年

■山本哲士の著作などに関して

*書籍・論文（年代順）

山本哲士「学校無化論とのマルクス主義的対応」『情況』、第98号、1976年

山本哲士「「学校」はもういない-ディスクールリング（学校無化論）への序」『市民』、1976年

山本哲士「イバン・イリイチの「自律共働性」と「非学校化」に関するノート：＜自律的学習＞の甦生のために-CIDOCからの帰国報告」『人文学報』、第137号、頁41-65、1979年

山本哲士『学校・医療・交通の神話』、新評論、1979年

山本哲士・吉本隆明『教育・学校・思想』、日本エディタースクール出版部、1983年

山本哲士『教育の分水嶺-学校のない社会』、せんだん書房、1984年

山本哲士『学校の幻想・幻想の学校-教育のない世界』、新曜社、1985年

山本哲士『学ぶ様式』、新曜社、1986年

栗原彬・本田和子・前田愛・山本哲士『学校化社会のストレンジャー——子どもの王国』、新曜社、1988年

山本哲士『教育が見えない-子ども・教室・学校の新しい現実』、三交社、1990年

山本哲士『学校の幻想 教育の幻想』、筑摩書房、1996年

山本哲士『教育の政治 子供の国家 新版』、文化科学高等研究院出版局、2009 年
山本哲士『イバン・イリイチ』、文化科学高等研究院出版局、2009 年
山本哲士『学校に子どもを殺されないために——親と教師の思考ツール』、文化科学高等研究院出版局、2009 年
荒木優太『在野研究ビギナーズ—勝手に始める研究生活』、明石書店、2019 年

＊雑誌などの媒体

『季刊 iichiko』バックナンバー

山本哲士の YouTube チャンネルでの動画内容

山本哲士のブログ記事：web place university[山本哲士のパブリックブログ講義]

<以下、必要があれば参照しうる文献>

■近年の学校論議論や、高度経済成長の時代の学校論・社会分析の土台

苅谷剛彦『大衆教育社会の行方—学歴主義と平等神話の戦後史』、中公新書、1995 年

木村元『学校の戦後史』、岩波書店、2015 年

四方利明「イヴァン・イリイチの産業社会批判の理論における学校化論-「脱学校論」再考-」『大阪大学教育学年報』、第 3 巻、頁 69-82、1998 年

KAKEN「日本の学校化社会成立の諸相—学校システム「周辺」部に注目して」

＊DS 論に肯定的・DS 論を自身の論の補強に引用している

下村哲夫「学校観の転換と青年の教育—脱学校論の視点から」『教育学研究』第 44 集, no. 2 (1977 年): p158～164.

菊池一美「学校解体論」『岩手大学教育学部研究年報』、1976 年

柴野昌山「青年期の教育と社会化」『教育社会学研究』(31), 頁 29-39, 1976 年

＊1970 年代の教育学者の言説を追う雑誌

『海外教育研究』の 1970 年代のバックナンバー

『現代教育科学』の 1970 年代のバックナンバー

＊「学校論関係文献目録」（1978 年）より

新井郁夫「学歴社会における反学校主義」『学歴効用論』、有斐閣、1977 年。

伊藤昇「学校教育批判にどうこたえるか」『総合教育技術』、1975 年。

梅根悟「2 つの学校観」『教育評論』、1971 年。

下村哲夫「「学校論」関係の文献解題」『現代教育科学』、1975 年

下村哲夫「脱学校論と現代学校教育」『教育経営研究』、1976 年

鈴木慎一「イギリス社会と学校観の変化—トライパータイティズム、コンプリヘンシング、ディスクーリング」『海外教育研究』、1977 年

竹内良知「現代社会と「学校化」－《Deschooling Society》を読んで」『情況』、1976年「デスクーリング論」研究グループ「デスクーリング論①～④」『海外教育研究』、1975年

船山賢次「中教審教育改革案の「学校」観」『生活指導』、1971年

丸木正臣「幻想的「学校教育万能論」」『児童心理』、1973年

＊「学校論・学校観に関する戦後文献目録」1997年

宇沢弘文「社会的不安定の根本要因－イワン・イリッチ「脱学校の社会」など(思想と潮流)」『朝日ジャーナル』、第20-23巻、頁61-63、1978年

梅根悟他「こんにちの教育問題と研究の課題－脱学校・学校解体論とのたたかいを中心に討議」『国民教育』、第35巻、頁149-165、1978年

太田和敬「脱学校論をめぐる論議」『教育』、第32-10、頁54-62、1982年

川添正人「市民参加と学習の構造化に関する一考察－市民参加の観点からみた脱学校論を中心に(矢野峻教授退官記念)」『九州大学教育学部紀要教育学部門』、第24巻、頁179-193、1978年

佐々木定典「学校教育観の点検－「脱学校論」をどう受け止めるか(80年代日本の課題論集)」『立法と調査』、第100巻、頁28-37、1980年

下村哲夫「脱学校論の示唆するもの－内なる制度信仰の克服のために(教育研究の課題)」『現代教育科学』、第21-10巻、頁82-90、1978年

下村哲夫「脱学校論で子どもは救えるか」『現代教育科学』、第22巻、12号、頁27-31、1979年

下村哲夫「学校批判・学校否定論の背景と問題点」『現代教育科学』、

深山正光「脱学校論・学校解体論の批判」『現代教育科学』、第22巻、5号、頁29-34・41、1979年

○広岡亮蔵における「発見学習」の概念について

2020年度より順次新学習指導要領が実施されることになっている。様々な改革が注目されているこの学習指導要領であるが、筆者は特に「主体的・対話的で深い学び」、いわゆる「アクティブラーニング」に興味を持った。この新学習指導要領に至るまでの文部科学省の答申の中で次のような一節が出てきている。

教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。（文部科学省、2012）

アクティブ・ラーニングという用語について解説したものであるが、その方法の一つとして「発見学習」を挙げている。この「発見学習」とは一体なんだろうか、というのが筆者が関心を抱いたことだった。

この言葉を手掛かりに源流をたどっていくと、ブルナーという科学者が1960年代に提唱した学習法であることがわかった。しかしブルナーの言う「発見学習」と今現在の「発見学習」ではその使われ方の文脈が異なっている。前者の「発見学習」は、「学習者に「再発見の過程」を経験させることにより、科学的発見の手法と体系的知識の習得を目指すとともに直観的思考を涵養する授業論」（古藤、2016）だったのに対し、現在の「発見学習」はむしろ「問題解決学習」に近い意味合いで使われている。

さて、「発見学習」の源流について述べたが当初のそれと現在のでは意味が変容していることがわかった。だが、ブルナーの理論の有用性がなかったというわけではないようだ。ブルナーの理論を日本に導入するのに活躍したのは広岡亮蔵だと言われているが、彼は多くの授業実践を残しており「発見学習」の有用性を提唱していた。そもそも彼は系統学習と戦後新教育における経験主義学習の対立を乗り越えるため、問題解決学習に系統性を持たせた「課題解決学習」を提唱した。その後1970年代の「教育の現代化」運動の際にブルナーの思想を受容し学習の系統性を担保しようとした。

『発見学習』において広岡は知識が爆発的に増加する時代において、網羅的な記憶学習では内容面でも方法面でも欠陥があると述べている。系統学習に関して「系統学習は（中略）知識面には強いが、思考的には弱くなりがちである」としている。一方で「問題解決的な主体学習の全体的な特徴は、思考面には強いが、知識面では弱い」とも述べている。そしてその理由について、系統学習は知識結果を重視するが知識過程を軽視している、その一方問題解決的な学習は知識過程を重視するものの知識結果を軽視しているからだ論じて

いる。そのうえで両方を重視することが大切だとしている。その実践として広岡は「発見学習」を提唱しているのだ。

以上を踏まえたうえで、広岡の思想の変遷（特に「学力」のとらえ方）や付属学校での教育実践の記録などをもとに「発見学習」についてさらに深めていければと考えている。

○研究目的・意義

系統的な教授か、それとも生徒の主体的な学習かという二元論に陥りがちな教育方法に関しての議論を批判的に乗り越えようとした広岡の思想を読み込むことで、現在の議論にも活かされる示唆が得られるのではないかと考えている。

また、ブルナーの学習の過程を重視する考え方は新学習指導要領にも表れているように思う。その関連についても論じることができればアクティブラーニングに関する議論に対して示唆するものがあるのではないかと思う。

○これからの方針

まず、ブルナー『教育の過程』を読み込みその理論の把握に努めようと思う。同時に広岡の思想をたどるため彼の著作も読んでいこうと思う。特に重要とされている『学力論』『学習過程論』を重点的に読むつもりである。また、金沢大学教育学部附属小学校での授業実践の記録も残されているため、それも検討していこうと考えている。

○参考文献

今井（2008）『我が国の「教育内容の現代化」におけるブルナー教育理論の受容に関する一考察』明星大学教育学研究紀要（23）、97－106、明星大学教育学研究室

広岡（1968）『発見学習』、明治図書

古藤（2016）『ポストモダンにおける授業論の分析的考察—その現代的意義を考える』日本教育大学大学院大学紀要（9）、p61-p73、日本教育大学大学院大学

文部科学省（2013）『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）』

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm （2020年6月23日閲覧）

○参考予定文献

小笠原（1986）『広岡の問題解決学習批判の再検討：「学習形態」を中心にして』兵庫教育大

学 学校教育専攻教育方法コース 修士論文

広岡（1955）『学習形態』、明治図書

広岡（1968）『学力論』、明治図書

広岡（1968）『学習過程論』、明治図書

水越（1970）『発見学習入門』、明治図書

J・S・ブルーナー 鈴木祥蔵、佐藤三郎訳（1963）『教育の過程』、岩波書店

テーマの概要や問題関心

私は「制服」に着目して卒論を書こうと考えている。私はもとよりファッション論に興味があり、その中でも特にファッションの持つコミュニケーション的な側面に注目している。

人は服を着ることで周りに「ことば」を発することができる。全身を高級ブランドで固めていれば「あの人は金持ちなんだ」、ロックバンドのTシャツを着ていれば「あの人は音楽が好きなんだ」ということが周りに伝わる。そういった周りへの発信力が強いファッションの最たるものの1つが学校制服ではないかと考える。学校制服は着ている人が「学生」であることを強く規定する。“実際には学生でなくても”「制服」がその人を「学生」にしてしまうのだ(ドラマやコンセプトカフェなどでよく見るだろう)。

「制服」はそれほど強いものであるからして、学校側からすれば、学生個人をその学校の規範に取り込ませるものとして利用しているだろう。鷺田は「現代では制服は個人の特異性・独自性を曖昧にし、平板化するものとして、あるいは個人を包囲して、ある公認のイメージの中に閉じ込めるものとして受け止められるものとなった。」と述べ、着る人が持つ閉塞感などのネガティブなものとして捉えられる「制服」について言及している。だからこそ学生の反抗は制服の「崩し着」や「改造」に現れる。

一方で、鷺田は自身の固有性を緩めて社会的に隠れることのできる「制服」という観点についても言及している。これは「個性を出せ」、「個性的であれ」という一種のスローガンに疲れた人間の固有性を適度に緩めてあげるものとして「制服」があるというものだ。この文脈では、その時代の流行服やファストファッションの量産された服も「制服」と言うことができる。

私は、以上で簡単に述べたような周りの人間や社会との関係の中での「制服」のコミュニケーション的な作用に着目し、「管理↔自由」という二項対立を超えたところで制服を捉えたいと考えている。そこで、現代から見れば古くなってしまっている四半世紀前の鷺田のファッション論から出発し、「制服」観を現代に即したものにアップデートすることで、今後「制服」が学生にとってどのような役割を担っていくのかを考察する。

今後の予定・方針、研究の方法

未だ読めていない鷺田の議論により広く目を通し、また、鷺田がもっとも影響を受けたメルロ＝ポンティの身体論について知ることによって理解を深める。制服とファッションを繋いでいる先行研究や現代ファッションと身体性との関連に目を通し、論文の方向性を定める。

参考文献リスト

・アニェス・ロカモラ&アネケ・スメリク編『ファッションと哲学—16人の思想家から学ぶファッション論入門』蘆田裕史監訳、フィルムアート社、2018年

- ・ M.メルロ・ポンティ『知覚の現象学』中島盛夫訳、法政大学出版局、1982 年
- ・ M.メルロ・ポンティ『知覚の哲学：ラジオ講演 1948 年』ステファニ・メナセ校訂・菅野盾樹訳、ちくま学芸文庫、2011 年
- ・ 蘆田裕史「溶けあう衣服と身体—ファッション批評のはじめかた」、『春秋』(528)p.1-4、春秋社、2011 年
- ・ 小澤昌之「青少年の学校制服に関する意識—大学生を対象とした質問紙調査をもとに」、『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』(69)p.35-49、慶應義塾大学大学院社会学研究、2010 年
- ・ 佐野勝彦『女子高生 制服路上観察』光文社新書、2017 年
- ・ 清水道子「卒業論文 メルロ=ポンティの身体論研究—ファッションからみる身体」、『哲学会誌』(28)p.67-79、学習院大学、2004 年
- ・ 孫珠熙「テキストマイニングによる高校制服着用時の感情の可視化」、『富山大学人間発達科学部紀要』10(2)p.181-191、富山大学人間発達科学部、2016 年
- ・ 知念渉『〈ヤンチャな子ら〉のエスノグラフィー：ヤンキーの生活世界を描き出す』青弓社、2018 年
- ・ 土屋みさと&堀内かおる「制服および着装行動に対する高校生の意識」、『日本家庭科教育学会誌』48(2) p. 141-149、日本家庭科教育学会、2005 年
- ・ 徳山真由美「ファッションが学校制服に与える影響について：1975 年(昭和 50 年)以降の学校制服とファッション」、『香蘭女子短期大学研究紀要』(55)p.31-46、香蘭女子短期大学、2012 年
- ・ 中山元編訳『メルロ=ポンティ・コレクション』、ちくま学芸文庫、1999 年
- ・ 成美弘至『コスプレする社会—サブカルチャーの身体文化』せりか書房、2009 年
- ・ 難波知子『学校制服の文化史:日本近代における女子生徒服装の変遷』創元社、2012 年
- ・ 難波知子「学校制服文化の継承と展開：2018 年「アルマーニ制服」から考える制服と標準服の関係 (ファッション)」、『現代風俗学研究』(18)p.23-32、現代風俗研究会東京の会、2018 年
- ・ 西谷真理子編『ファッションは語りはじめた：現代日本のファッション批評』フィルムアート社、2011 年
- ・ 林央子『拡張するファッション』ブルース・インターアクションズ、2011 年
- ・ 松田いりあ「学校制服の「生産」と「消費」：ファッション化の経緯および着用の現状」、『ソシオロジ』50(1)p.35-50、社会学研究会、2005 年
- ・ 松田いりあ「「ファッション化」後における学校制服の着用状況—専門学校生・短大生・大学生を対象とした質問紙調査より」、『文化学年報』(24)p.73-95、神戸大学、2005 年
- ・ 三田村落子『コスプレなぜ、日本人は制服が好きなのか』祥伝社新書、2008 年
- ・ 森伸之&内田静枝『ニッポン制服百年史：女学生服がポップカルチャーになった！』河出書房新社、2019 年
- ・ 山口晶子「若者文化としての学校制服—女子高校生の制服おしゃれに着目して」、『子ども社会研究』(13)p.62-71、日本子ども社会学会、2007 年
- ・ 米澤泉「日本の「制服ファッション」：JJ ガールから JS ガールまで」、『Fashion talks... : the

journal of the Kyoto Costume Institute: 服飾研究』(6)p.32-38、京都服飾文化研究財団、2017 年

- ・ 鷺田清一「新・制服主義」、『中央公論』109(5) p140-146、中央公論新社、1994 年
- ・ 鷺田清一『ちぐはぐな身体—ファッションって何?』 筑摩書房、1995 年
- ・ 鷺田清一「人生を「制服」にしていますか (特集・おしゃれって何だろう)」、『母の友』(523)p.26-31、福音館書店、1996 年
- ・ 鷺田清一『ひとはなぜ服を着るのか』日本放送出版協会、1998 年
- ・ 鷺田清一『てつがくを着て、まちを歩こう—ファッション考現学』同朋舎、2000 年
- ・ 鷺田清一監修『シリーズ・服と社会を考える 2 服とコミュニケーション』岩崎書店、2007 年

「テーマ」

民主的家族の創造可能性__ギデンズの議論をもとに

09-191112 教育学部基礎教育学コース 4 年

萩野貴明

「問題関心」

小学生の頃、親の言うことはある種絶対的なもので、自分の意見ややりたいことなど言えずに悶々としていた記憶がある。本当は塾なんて行きたくなかったが、完全に服従していた。一方で、90 年代以降、家族の個人化、多様化が進み、家族関係自体を選択したり解消する自由も述べられるようになる。現代、入退出自由で家事や育児を共同するシェアハウスがメディアで話題を呼んだり、近代の家族神話は解体し家族の変容が認識される中で、家族の個人化、多様化は一層進んでいるように思う。

こうした中で、家族とは何で、その中での親密な関係性とはいかなるものなのかという疑問がある。

90 年代後半にギデンズは、民主的な家族関係について述べる。

「家族の文脈における民主主義は、平等、相互尊重、自主性、合議の上での意思決定、暴力からの自由を、とりわけ高く評価する。民主的な親子関係のあり方は、これらの価値規範から導くことができるのである。(ギデンズ,1999)」

本項では、民主的な家族関係とはいかなるもので、それは現代において果たして創造可能か、また問題点があるとすればそれは何か、をギデンズの議論をまとめると同時にそれへの批判を加えることを試みる。

「研究目的」

検討事項としては主に以下の二つである。

ギデンズの「純粋な関係」「情念の民主主義」が意味するものは何で、それをもとに親子関係における民主的関係はいかにして創造可能か

ギデンズのいう「民主的家族」の追求において、とりこぼされてしまうものは何であるか

一つ目について、ギデンズ研究を通して議論をまとめていく。

民主的な親子関係において、ギデンズは、「純粋な関係」「情念の民主主義」という概念を用いる。

「純粋な関係」について、「その意味するところは、おたがいのコミュニケーションが双方に利益をもたらすがゆえに持続される、情緒的コミュニケーションにもとづく関係である。(ギデンズ,2001,125 頁)」と述べている。

「情念の民主主義」については、「情念の民主主義のもとで、子どもたちは口答えしてもかまわないどころか、口答えするべきなのである。情念の民主主義は、子どものしつけや親への敬愛をなくそうとするのではなく、規律や尊敬に段差をつけようとするのである。(ギデン

ズ,2001,129 頁)」

「純粋な関係」において、お互いのコミュニケーションが双方に利益をもたらすがゆえに持続される、とは親子関係ではどのようなことか、また、「情念の民主主義」については、規律や尊敬に段差をつけるとはどういうことか、など様々疑問が出る。

これらをギデنزの議論を整理した上で、家族の個人化、多様化が一層進んだ現代において、それは果たして創造可能なのかについて論じる。

二つ目については、それらを踏まえた上でギデنزの議論への批判を試みる。

ギデنزの議論を「交換と贈与」の観点で捉えると、他者との関係性の中で育まれるものやお互いの相互作用といったものが何か蔑ろにされているような印象を受ける。

「愛」は有用性の次元とは全く違うのです。有用性は交換の次元で、「愛」というのは交換を超えて贈与することです。～(矢野,2013)」

こうした観点をもとに、ギデنزの民主的家族という議論への批判を試みたい。

「今後の予定」

今後の予定については、主にギデنزが述べる民主的家族についてそれがどのような時代背景や文脈で唱えられているのかも含めて、読み進めていく。

その上で、他者との関係性や、矢野智司の『贈与と交換の教育学（矢野,2008）』などの観点をもとにいかなる批判ができるのかを論じていく。

（参考文献）

『親密性の変容_近代社会における、セクシャリティ、愛情、エロティシズム』

アンソニー・ギデنز著、松尾精文,松川昭子訳 1995

『暴走する世界_グローバリゼーションは何をどう変えるのか』

アンソニー・ギデنز著、佐和隆光訳 2001

『第三の道_効率と公正の新たな同盟』

アンソニー・ギデنز著、佐和隆光訳 1995

『民主的家族の探求_方法論的ナショナリズムのもう一つの越え方』 田村哲樹 2015

『家族の民主化_戦後家族社会学の＜未完のプロジェクト＞』 阪井裕一郎 2012

『家族の個人化』 山田昌弘 2004

『贈与と交換の教育学』 矢野智司,2008

『＜特集＞問い直そう、保育のあたりまえのこと 12:幼児期は「準備期？」』

矢野智司,伊集院理子,浜口順子 2014

「壊れた人間」が「恢復」すること（仮題）

——大江健三郎における「」を手がかりに——

1. 概要

大江健三郎は 10 歳で終戦を迎えたが、そのことが持つ意味は両義的であった。天皇に対する絶対的な崇拜からの解放であったと同時に、自身の一部でもあったアイデンティティを失った経験でもあったからだ。大江（2013）は自身の小説「セブンティーン」に対する三島由紀夫の「大江っていう小説家は、じつは国家主義的なものに情念的に引きつけられている人間じゃないだろうか」という指摘が正しかったと振り返っており、大江のアイデンティティは全体主義的なものとさえ結びつきかねない危うさを孕んでいたことがうかがえる。そのような大江の姿勢は「祈り」が小説での一つの主題であった 80 年代・90 年代とも連続性を有している。自身を「信仰を持たない者」として規定しながらも宗教的な「祈り」を有し（大江 1992）、「人間を超えたものと個人の自分との関係を結ぼうという態度」としての神秘主義に傾倒していく（大江 2013）姿勢は不安定なアイデンティティを安定させるための試みとして解することもできるだろう。

大江（2003）はエドワード・W・サイードとの往復書簡の中で、1995 年に刊行された『燃えあがる緑の木』を境に小説をやめようとしていた時の経験について、「自分の作品が、出発時の姿勢と野心から離れて、個人的かつ神秘主義的な迷路に入り込み、そのまま書き続けてゆけば、小説自体で、ゆがんだ信仰告白をしてしまいそうであったから」であったと語る。同時にその窮境の中で読んでいたサイードの“Culture and Imperialism”を読んで「歴史と現実とに背を向けている自分への批判」を確実なものとしていた。実際、『』以降の「」では宗教的なものや、単純な「中心」と「周縁」の二項対立は後景化している。だとするならば、「」は不安定なアイデンティティから目を背けないアクチュアリティを有した作品を目指したものではないか。

「」においては、大江が教育に対して積極的に発言を行うようになったことも一つの特徴をなしている。教育基本法改定に対しての抵抗や、子供に向けたエッセイなどがそれに該当するだろう。大江は先のサイードとの往復書簡で、日本人の多くが「自立した誇りとモラルティー」を喪失しており、それは教育によってしか「恢復」されないため「」はその教育に役立てるものにしたいと表明している。「」は当時の大江の教育思想と切り離せないものであることは間違いないようだ。

卒業論文では「」に見られる大江の教育思想を分析することで、不安定なアイデンティティを安易に和解させないような仕方で「恢復」させる人間形成の契機を、そして死者をも含む他者に対しての想像力を育む思想を導き出すことを目論む。第一節では、「」に強い影響を与えたサイードの「晩年のスタイル」という概念を大江がいかなる形で受容したかを論じる。

「晩年のスタイル」という概念は、「アーティストが老いるにつれて和解や結論を求めるというのではなく、むしろそれまで以上に大きな絶望、最終感を抱く段階に入ってから後のスタイル」であり、「あらゆることに関して不協和音を意識した」状態である(大江&サイド 1995:27)。成長によって調和するのではなく、むしろ不協和音が強く意識された、サイド、そして大江の「晩年のスタイル」は新たな人間形成論の可能性を提示してくれるだろう。第二節では、「晩年のスタイル」が強く意識された「」の一作品、『さようなら、私の本よ!』の読解を通じて、他者への想像力を根幹に有する大江の教育思想を解き明かす。死者をも含みこむ対話のネットワークにおいて、「私」は他者といかにして対話が可能なのか。サイドの「対位法」的な対立を維持しながらも、そこに死者との対話や、磯崎新の「unbuilt」という概念を導入することによって、サイドの思想を独自の形で発展させた、各人が自由な連結可能性と分離可能性を持つことのできる共同体へとつながる大江の思想を、『さようなら、私の本よ!』には見出すことができるだろう。

2. 研究目的

大江の生は非常に不安定なものであった。10歳での終戦や、障害を持って生まれた長男の誕生はそれを如実に表しているだろう。作品にもその不安定さは現れているように思われたが、「」には哀愁を感じさせながらもその先の希望のようなものを感じさせてくれる。大江の思想を学ぶことで、アイデンティティに向き合うための一つのモデル、あるいは戦略を導き出せるのではないかと。また、大江は他者に対する志向を一貫して持ち続けていた。「発達」概念が見落としやすい、他者への想像力の問題を、大江の思想は教育学に対して投げかけてくれるかもしれない。

3. 今後の予定・方針

ひとまずはサイドの思想を学ぶことで、大江とサイドの思想の接続を試みたい。また、第二節では小説を扱うことになるが、小説はあくまでもフィクションであるため、そこに書かれていることすべてを大江の思想として扱うわけにはいかないだろう。小説の思想史的な位置づけをする必要がある。

参考(予定)文献

磯崎新(2001)『UNBUILT/反建築史』TOTO 出版。

今井康雄(1998)『ヴァルター・ベンヤミンの教育思想』世織書房。

大江健三郎(1992)『人生の習慣』岩波書店。

大江健三郎(1993)『壊れものとしての人間』講談社、89-115 頁。

大江健三郎(2003)『大江健三郎往復書簡—暴力に逆らって書く—』毎日新聞社。

大江健三郎(2005)『さようなら、私の本よ!』講談社。

大江健三郎(2005)「「」に希望がある(か?)」『新潮』1月号、新潮社、307-313 頁。

大江健三郎(2006)「「後期のスタイル」という思想——サイドを全体的に読む」『すばる』28号、集英社、2006年7月、18-37 頁。

大江健三郎（2007）『「話して考える」と「書いて考える」』集英社。

大江健三郎（2010）『「伝える言葉」プラス』朝日新聞出版。

大江健三郎（2013）『大江健三郎 作家自身を語る』新潮文庫。

大江健三郎（2013）『晩年様式集』講談社。

大江健三郎&サイド(1995)「生の終りを見つめるスタイル—文学・社会・時代—」『世界』611号、岩波書店、1995年8月、22-41頁。

小野正嗣（2005）「受けとめあう「二人組」——大江健三郎『さようなら、私の本よ！』をめぐって」『群像』1月号。

菊間晴子（2017）「「(レイト・ワーク)」にあった「希望」——大江健三郎の小説作品における死者とのコミュニケーションに着目して——」『日本近代文学』第96集、93-107頁。

サイド・エドワード（1998）『文化と帝国主義1』みすず書房。

サイド・エドワード（2001）『文化と帝国主義2』みすず書房。

サイド・エドワード（2007）『晩年のスタイル』大橋洋一訳、岩波書店。

田尻芳樹（2009）『ベケットとその仲間たち』論創社。

バトラー・ジュディス（2019）『分かれ道—ユダヤ性とシオニズム批判—』大橋洋一・岸まどか訳、青土社。

原広司（2004）『DISCRETE CITY vol. 1』TOTO 出版。

原広司（2004）『DISCRETE CITY vol. 2』TOTO 出版。

ベンヤミン・ヴァルター（1995）「歴史の概念について」『ベンヤミン・コレクション1』筑摩書房。

村上克尚（2013）「対話のネットワークとしての「私」——大江健三郎『さようなら、私の本よ！』における諸概念の分析を通じて——」『言語情報科学』11号、259-275頁。

山名淳（2019）「記憶の制度としての教育—メモリー・ペダゴジーの方へ」『いま、教育と教育学を問い直す』森田尚人・松浦良充編、東信堂。

『現代思想』2020年、vol.48-3、青土社。

1. テーマ

価値や有用性のような「意味」で満たされた空間としての学校を「脱意味化」していく可能性について

2. 問題関心、テーマ選択の理由等

大学に進学し様々な価値観に曝されるうちに、それまでの自分の生き方が否定されたように感じたため。自己や社会に流動性がなければこうした状況から抜け出すのは難しい。しかし今日の学校においては、理想的とされる単一的な人間性が要求されているきらいがある。自分自身、教師や周囲の生徒からそのような期待を感じて学校生活を送っていたし、「いい子」でさえいれば評価され何の心配もなかった。しかし、そのように生徒/子ども/人間の理想的な姿をあらかじめ規定しそれに向けて「発達」を促すことは、同時にそこから疎外される存在を生み出すことに繋がりはしないだろうか。

3. 今後の方針

ベンヤミンのテキストを掘り下げていくとともに、彼が現状を打破するような「飛躍的な想起」のフィールドとして着目した夢やシュルレアリスムといった前言語的な（＝「無意味」な？）経験についての理解も深めていきたい。そうした経験を重視することで多様な可能性/選択肢をひらき、既存の固定的で直線的な意味空間を解体していく方向性を示したい。新たな記号的差異を示すだけではコードの体系そのものを揺るがすことはできないとしたボードリヤールと、新しくヘゲモニックな体系を作るとは循環に陥ってしまうとしたベンヤミンや D&G らの、一見すると対立とも捉えられる関係性についても整理する必要がある。

ただ、このような話題は抽象的な議論に陥る可能性も高い。よりアクチュアリティのある問いを立てるとすれば、「主体性」のようなものが称揚される今日の状況の中で、学校文化に適応し従順であった(そしてそれだけが取り柄であった)子どもはどのように否定されずに受容されうるのか、あるいはどうすれば自分の中でアイデンティティを変容させる(別に変容させなくてもいい)ことができるのかといったものが考えられる。疎外された子どもの受容を社会の側から切り取るのか、子どもの内面から見るのかは未定だが、いずれの場合もやはり前言語的な経験に着目することになると思われる。その際、差異を孕みながらも全体としては同一性を保つというベンヤミンのメディア論を参考にしようと考えている。また価値空間を解体する場・手段としての芸術にも興味がある。（「地」と「図」の考え方や、ビジュアルな領域における時間感覚の援用など）

考えなければならない課題としては、倫理観のような一般的・普遍的(そもそもの定義が曖昧な言葉だが)な価値観を主張することや、絶対的に信じられるもの/依って立つものの喪失という観点との兼ね合いが挙げられる。

4. 既に読んだ(*)/今後読みたい(・)文献

- * Benjamin, Walter (1995)『ベンヤミン・コレクション 1 近代の意味』浅井健二郎・久保哲司訳, 筑摩書房. …「複製技術時代の芸術作品」(1935), 「歴史の概念について」(1940)
- * Benjamin, Walter (1969)『ヴァルター・ベンヤミン著作集 1 暴力批判論』高原宏平他訳, 晶文社. …「暴力批判論」(1921), 「経験と貧困」(1933)
- * Böhm, Gottfried (2017)『図像の哲学 いかにイメージは意味をつくるか』塩川千夏・村井則夫訳, 法政大学出版局.
- * Le Brun, Annie (2017)『シュルレアリスムと抒情による蜂起 アンドレ・ブルトン没後 50 年記念イベント全記録』塚原史他訳, エディション・イレーヌ.
- * Litt, Theodor (2016)「現代を歴史的に理解する」『歴史と責任 -科学者は歴史にどう責任をとるか』小笠原道雄他訳, 東信堂.
- * 今井康雄 (1998)『ヴァルター・ベンヤミンの教育思想 メディアのなかの教育学』世織書房.
- * 上野正道 (2013)『民主主義への教育 学びのシニシズムを超えて』東京大学出版会.
- * 桂英史 (2020)『表現のエチカ』青弓社.
- * 折出健二 (2018)『対話的生き方を育てる教育の弁証法 -働きかけるものが働きかけられる-』創風社.
- * 兼本浩祐 (2018)『なぜ私は一続きの私であるのか ベルクソン・ドゥルーズ・精神病理』講談社.
- * 小玉重夫 (2003)『シティズンシップの教育思想』白澤社.
- * 高橋勝 (2007)『経験のメタモルフォーゼ 〈自己変成〉の教育人間学』勁草書房.
- * つくみず (2020)『シメジシミュレーション』KADOKAWA.
- * 林道郎 (2015)『いま読む! 名著 ボードリヤール『象徴交換と死』を読み直す 死者とともに生きる』現代書館.
- * 鷲田清一 (2013)『〈ひと〉の現象学』筑摩書房.
- * 渡辺哲男他 (2019)『言葉とアートをつなぐ教育思想』晃洋書房.
- ・ Baudrillard, Jean (1984)『シミュラクルとシミュレーション』竹原あき子訳, 法政大学出版局.
- ・ Bolz, Norbert (2000)『ベンヤミンの現在』岡部仁訳, 法政大学出版局.
- ・ Breton, André (1992)『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』巖谷國士訳, 岩波書店.
- ・ Butler, Judith (2019)『分かれ道 -ユダヤ性とシオニズム批判』大橋洋一他訳, 青土社.
- ・ Deleuze, G. et Guattari (1994)『千のプラトー』宇野邦一他訳, 河出書房.
- ・ Freud, Sigmund (2019)『新訳 夢判断』大平健編訳, 新潮社.
- ・ Tzara, Tristan (1985)『ダダ・シュルレアリスム 変革の伝統と現代』浜田明訳, 思潮社.

第一回卒論指導会発表資料

教育学部基礎教育学コース4年 山本 健介

1. テーマ案

日本社会における運動部活動の必要性と今後の在り方

2. 概要及び問題関心

近年、運動部活動に対する風当たりが強まっており、一部では部活不要論なるものが叫ばれるようになりつつある。その一方で、運動部活動は学校教育の一環として大きな役割を果たしてきた。文部科学省は、運動部活動の意義について以下のように述べている。

「運動部活動は、学校教育活動の一環として、①スポーツに興味と関心を持つ同好の児童生徒が、教員等の指導の下に、自発的・自主的にスポーツを行うものであり、より高い水準の技能や記録に挑戦する中で、スポーツの楽しさや喜びを味わい、学校生活に豊かさをもたらす意義を有している。また、運動部活動は②児童生徒が体育の授業で体験し、興味・関心を持った運動を更に深く体験するとともに、授業で身に付けた技能等を発展・充実させることができるものであり、逆に、部活動での成果を体育の授業で生かし、他の生徒にも広めていくこともできるものである。さらに、運動部活動は、③自主的に自分の好きな運動に参加することにより、体育の授業に加えて、スポーツに生涯親しむ能力や態度を育てる効果を有しており、あわせて、体力の向上や健康の増進を一層図るものである。その上、④学級や学年を離れて生徒が活動を組織し展開することにより、生徒の自主性、協調性、責任感、連帯感などを育成し、仲間や教師(顧問)と密接に触れ合う場としても大きな意義を有するものである。」

このように、運動部活動の意義は4種類に大きく分類することができる。つまり、これら4つが運動部活動に期待されていること、そして運動部活動に所属するメリットである。もし、以上の全てが何かによって代替可能となった場合に、運動部活動の存在価値は大きく下落してしまう。そういった代替可能なものは存在しうるのか、そして今後、運動部活動はどのような形態をとるべきなのかということについて考察していきたい。

3. 研究目的

日本社会において、運動部活動は学校教育の一環としても、アスリート育成の場としても、大きな存在価値を示してきた。部活不要論が方々で叫ばれている一方で、運動部活動を支持する声も多数存在する。双方の主張を明確にしつつ、学校教育及び青少年スポーツの両側面からアプローチした今後の運動部活動のあるべき姿を提案したい。

4. 今後の予定・方針

- ・先行研究などを参考に、運動部活動の歴史について理解を深める。
- ・自分の中のイメージの要素が大きいもの(部活不要論、クラブチーム)についての実態を調査し、研究の方向を明確にする。
- ・場合によっては、中学校或いは高校、または競技の絞り込みが必要となる可能性もある。

・必要に応じてアンケート調査を行う。

5. 参考予定文献

- 青柳健隆、岡部祐介（2019）『部活動の論点-これからを考えるためのヒント』
- 中澤篤史（2014）『運動部活動の戦後と現在-なぜスポーツは学校教育に結び付けられるのか』
- 中澤篤史（2017）『そろそろ部活動のこれからを話ませんか-未来のための部活講義』
- 尾見康博（2019）『日本の部活（BUKATSU）-文化と心理・行動を読み解く』
- 長沼豊（2017）『部活動の不思議を語り合おう』
- 神谷拓（2015）『運動部活動の教育学入門-歴史とのダイアログ』
- 大谷善博（2008）『変わりゆく日本のスポーツ』
- 山本浩二、荒木祥一、神野賢治（2011）「学校部活動への関わりと社会性獲得との関連性に関する実証的研究」『津山工業高等専門学校紀要』第 52 巻、95-100 頁
- 山本浩二（2011）「社会性獲得にみる学校運動部活動の教育的有効性に関する考察」『日本高専学会誌』、第 16 巻、第 3 号、153-158 頁
- 神谷拓（2014）「運動部活動の制度史と今後の展望」『体育科教育学研究』第 30 巻、1 号、75-80 頁
- 大竹弘和、上田幸夫（2001）「地域スポーツとの「融合」を通じた学校運動部活動の再構成」『日本体育大学紀要』第 30 巻、記念特別号（第 2 号）、269-277 頁
- 佐々木創（2016）「学校部活動をとりまく環境と民間スポーツクラブの連携」『東北女子大学・東北女子短期大学紀要』No.55、105-111 頁
- 清水将（2011）「高等学校における運動部活動の教育課程上の位置づけに関する検討」『東亜大学紀要』第 14 号、17-32 頁
- 立木宏樹（2014）「少年期スポーツにおけるクラブと学校運動部の関係性に関する社会学的研究-J ユースクラブと高校サッカー部の意識形成の比較より」『九州保健福祉大学研究紀要』第 15 号、13-22 頁
- 作野誠一（2011）「学校運動部のジレンマ-スポーツクラブとの共存は可能か-」『現代スポーツ評論 24 ジュニアスポーツの諸問題』、63-75 頁

タイトル（取り扱う予定のテーマ）

演劇的手法をいかに教育に組み込むか

テーマの概要や問題関心

教育に即興劇やロールプレイなど、ある一定の役割を与えて相互に関わらせる演劇的な手法を導入することを研究対象とし、どのようにそれを導入すれば効果的であるかを検討したい。

ある授業で行った即興劇を通して自分と直接は結びつかない事象に対しても当事者意識を持つことが出来るようになったという自身の経験から、この問題に関心を持った。

イギリスのドラマ教育界を代表する教育者・ギャビン・ボルトン(Gavin Bolton)は、教育現場において実際に様々な役として動いてみることで、机上に止まらない感情を伴った理解が得られるとしている。ボルトンはドラマを教育現場において何かを教えるための手段とみなしている一方、ピーター・アブス(Peter Abbs)はドラマそのものを教えることを目的としている。有用性に基づいて議論される学校教育に「ソクラテス的思考と美的経験」を取り戻すべく、芸術をカリキュラムに位置付けるべきだとしている。

両者は正反対であり、アブスはボルトンの立場を「美的・芸術的観点」を欠くと批判している。一方でボルトンもアブスの立場を芸術至上主義に陥るあまり子供を置き去りにしていると捉える。

ドラマ・演劇をどのように学校教育という場で役立てるには、どのような形を取れば良いのだろうか。そのためには、演劇・教育の性質、そしてそれらの関係性を改めて捉え直す必要があると感じる。竹内敏晴は『演劇と教育』の中で、以下のように述べている。

演劇は本来祭りとか分ちがたく発展してきた芸術であり、日常の社会生活秩序を逸脱して、抑圧されていた生のエネルギーを奔放に溢れさせる場をつくり出す。それゆえ、近代学校教育が目指す科学的思考の訓練と秩序ある市民生活規律の伝承とは反対の志向をもつといえよう。...近代学校教育に演劇が導入されたのは、無害な遊戯ないし教養主義的な補完物としてであって、体育における無意識や性の無視と対応しているといい得る。

ここから、日常と非日常、身体性、遊戯論といった切り口から演劇や教育を捉えることが必要だと考える。

研究目的

演劇的手法をどのように取り入れれば効果的であるかを明らかにする。

今後の予定・方針、研究の方法

- 文献を中心に研究を行う(フィールドワークは可能なら実施する)。
- 演劇・芸術・教育の性質を比較する際の軸として、以下を検討している。

①日常と非日常・遊戯

精神の非日常的な流れが遊びの内実である(汐見, 2001, 111-114 ページ)という主張から、あそびは日常の中の非日常であり、この2つの軸は関連があると思われる。遊びを積極的に学校教育に取り入れることを提唱したデューイ、また、遊びにおいて「自由」と「規律」という概念を重要な要素として位置付けたホイジンガやカイヨワの遊戯論を演劇や教育に結びつけたい。

②身体性③虚構性

参考文献リスト

武田富美子、渡辺貴裕(2014)『ドラマと学びの場—3つのワークショップから教育空間を考える—』晩成書房

竹内敏晴(1989)『からだ・演劇・教育』岩波新書

川島裕子、中島裕昭、渡辺貴裕、高尾 隆、鈴木直樹、中西紗織、田中龍三、石野由香里、芝木邦也(2017)『〈教師〉になる劇場—演劇的手法による学びとコミュニケーションのデザイン』フィルムアート社

渡部淳(2014)『教育におけるドラマ技法の探究——「学びの体系化」にむけて—』獲得型教育研究会

栗原福也(1972)『ホイジンガ その生涯と思想』潮出版社

ロジェ カイヨワ著、多田道太郎・塚崎幹夫翻訳(1990)『遊びと人間』講談社学術文庫

ホイジンガ著、高橋英夫訳(1963)『ホモ・ルーデンス 人類文化と遊戯』中央公論社

飯塚順子(2006)「デューイによる遊びの捉え方について」『教育方法学研究』15号、東京教育大学教育方法 談話会

坪井節子、中山夏織、飛田勘文、蓬萊竜太、山口宏子、山名淳(2019)『コドモのミライ —現代演劇と子どもたち—』早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

佐藤学(2003)「芸の技法を生の技法へ」佐藤学・今井康雄編著『子どもたちの想像力を育む—アート教育の思想と実践—』東京大学出版会

汐見稔幸・加田文男・加藤繁美(2001)『これが、ボクらの新・子どもの遊び論だ』童心社

多田道太郎、塚崎 幹夫(1990)『遊びと人間』講談社

渡邊淳子 演劇的手法を取り入れた協同学習の効果 熊本保健科学大学研究誌 = Journal of Kumamoto Health Science University (16), 59-65 (2019) 熊本保健科学大学

武田富美子 自分事として考える道德授業：演劇的手法が生み出す協働学習(授業記録を読もう!書こう!)--(11の多様な授業記録を読もう!:一斉・協同・オルタナティブ) 授業づくりネットワーク (30), 68-73 (2018) 学事出版

青柳達也、角和博 アクティブ・ラーニングにおける演劇的手法の意義と役割

佐賀大学教育実践研究 The journal of studies on educational practices : a bulletin of the Integrated Center for Educational Research and Development, Faculty of Culture and Education, Saga University (34), 77-89 (2017) 佐賀大学教育学部附属教育実践総合センター

太田寛士 演劇的手法が促す読みの変容：文学的文章の学習指導の場合
教育学研究紀要 62(1), 262-267 (2016) 中国四国教育学会

渡辺貴裕 文学作品を用いた演劇的手法を通しての話すこと・聞くことの学習の可能性：イギリスのドラマ教育における例を手がかりに 読書科学 58(1), 49-59 (2016) 日本読書学会

渡辺貴裕 イギリスのドラマ教育における「専門家のマント」の展開
教育方法学研究 40(0), 15-26 (2015) 日本教育方法学会

谷口直隆 国語科の学習における演劇的手法の役割：コミュニケーション学習の方法としての可能性 全国大学国語教育学会発表要旨集 (116), 176-179 (2009-05-30)

羽地朝和 演劇的手法で自己肯定感を育むプレイバック・シアター(特集 学習スタイルの新潮流--「一方向の講義」から「双方向の創発」へ)―(「気づき」を促す学びの最新事例)
企業と人材 41(919), 32-37 (2008-02-20) 産労総合研究所

姚瑶著 演劇的手法による日本語教育に関する理論的・実証的研究：中国人日本語学習者の情意要因を中心に 花書院, 2017.- (比較社会文化叢書; v. 40)

渡辺貴裕 演劇的手法を用いた「深い」学習とはどういうものか―G.ボルトンの「理解のためのドラマ」論をもとに― 2016年10月教育方法 45号 p99-112

1. タイトル

戦後日本における「戦争の記憶」―諸外国との関係性構築の視点から―

2. テーマの概要・問題関心

法学部で国際関係論について学んだ経験から、主権国家が対立する国際社会の中で「平和」を維持することの難しさを感じてきた。地域紛争も含めれば、戦闘が起こらなかった日が戦後何日あっただろうか。このような厳しい国際社会の中であって、日本は戦後、他国との「戦争」を一応、一度もせず今日に至る。その日本国内の平和意識に大きな役割を果たしているのが、第二次世界大戦における悲惨な体験・遺産を記憶し、受け継いでいく試みである。このような動きの中で継承されてきた数々の記憶は一つの「戦争」の集合的記憶として捉えられると考えられている。

しかし、そのように、戦争の悲惨さを継承し、戦後交戦を行ってこなかった日本の「平和」は消極的平和に過ぎないという批判がある。実際、日本は、EU や ASEAN、AU のような、積極的に平和を目指す志向、地域的枠組みに欠ける面がある。もちろん、ASEAN+3 や、ASEAN 地域フォーラムといったものに参加する試みはあるが、「東アジア共同体」のような構想の実現には程遠いことが現実である。

なぜ、このような平和構想が困難なのか。上記の諸共同体が、戦争を他国との関係性の中で勃発するものと捉え、その関係性の改善、維持のために考案されたことを鑑みると、日本は「関係性構築」の視点が希薄であるといえるのではないか。戦争はよくないことだ、悲惨なことだ、絶対に行ってはならないことだ、といった、戦争を単純に否定する言説は極めて一般的であるが、では、どのようにして戦争を起こさない関係を構築できるのかという点についての議論は少数ではないだろうか。

このような、「関係性」の視点の希薄さを生み出している原因の一つとして、日本人の「戦争」イメージ、集合的記憶としての「戦争」が挙げられるだろう。その集合的記憶は如何にして形成されてきたのだろうか。

集合的記憶が形成される際、無数にある個別的な記憶の内、いずれを集合的記憶に記憶するかを巡って、恣意性が認められる。戦争についての記憶に関しても、時代の趨勢や政治から、多分に影響を受けてきた。では、なぜ日本における「戦争」の記憶に関係性の視点が希薄なのか、日本の政治と、国際情勢からの影響から考えてみたいと思った。

以上のような問題関心から、日本における戦争の集合的記憶に関し、日中戦争の記憶を中心に、日本における日中戦争の記憶と日本の政治動向、国際情勢の関連性を考察したいと考えている。

3. 研究目的

地域的共同体を構想する際、参加する諸国が、互いを同じ地域に存在する隣国として捉え、他国との関係の維持、向上に積極的であることが極めて重要である。これは、東アジア共同

体を構想する際に、同共同体構想が困難になる一因であったといえる。(日本、中国、韓国の間で、そのような隣国としての共同意識が十分でない)とりわけ、日本と中国の両国関係の困難さは、東アジア共同体構想の大きなハードルとなっている。

では、そのような「関係性」という視点からの平和構築を志向する国民意識はどのようにしたら涵養されるのか。私は、日本人の平和意識の主要な位置を占める集合的な戦争記憶から、「関係性」の視点が欠落した原因を検討することが、「関係性」という視点の導入に必要とされるものの検討へと通じると考えた次第である。

4. 今後の予定・方針

まず、アライダ・アスマンやアルヴァックスの著作を読み、記憶空間、集合的記憶に関する知識を深めたい。また、積極的平和に関して、ガルトウングの著作を読み、理論を理解したいと思う。

その上で、日本における日中戦争の記憶を調べ、日本政治、国際情勢と対照し、考察したい。日中戦争の記憶の記録媒体として何を取り上げるかは現在検討中である。

資格試験(8月、10月、1月頃)、教育実習(10月頃)があるため、基本的にできる限り早めの進行を目指したい。

5. 参考文献リスト

- ・ヨハン・ガルトウング 『ガルトウング平和学の基礎』 法律文化社 2019
- ・ヨハン・ガルトウング 『ガルトウング紛争解決学入門』 法律文化社 2014
- ・ヨハン・ガルトウング 『ガルトウングの平和理論：グローバル化と平和創造』 法律文化社 2006
- ・ヨハン・ガルトウング 『ガルトウング平和学入門』 法律文化社 2003
- ・ヨハン・ガルトウング 『平和的手段による紛争の転換：超越法』 平和文化社 2000
- ・アライダ・アスマン 『想起の文化：忘却から対話へ』 岩波書店 2019
- ・アライダ・アスマン 『想起の空間：文化的記憶の形態と変遷』 水声社 2007
- ・アライダ・アスマン 『記憶の中の歴史：個人的経験から公的演出へ』 松籟社 2011
- ・モーリス・アルヴァックス 『記憶の社会的枠組み』 青弓社 2018
- ・石田雄 『記憶と忘却の政治学：同化政策・戦争責任・集合的記憶』 明石書店 2004
- ・森村敏己編 荒又美陽他 『視覚表象と集合的記憶：歴史・現在・戦争』 旬報社 2006
- ・伊香俊哉 『戦争はどう記憶されるのか―日中両国の共鳴と相剋』 柏書房 2014
- ・田島高志著 高原明生,井上正也編集協力 『日中平和友好条約交渉と鄧小平来日』 岩波書店 2018
- ・『日中外交関係の改善における環境協力の役割：学生懸賞論文集』 日本日中関係学会編 2017
- ・五百旗頭薫他 『戦後日本の歴史認識』 東京大学出版会 2017
- ・凌星光 『21世紀の日中関係の在り方：中国の国内体制と外交戦略』 東出版 2016
- ・俞敏浩 『国際社会における日中関係：1978～2001年の中国外交と日本』 勁草書房 2015

- ・川島真編 黄栄光 『近代中国をめぐる国際政治』中央公論新社 2014
- ・吉田重信 『不惑の日中関係へ：元外交官の考察と提言』 日本評論社 2012
- ・『日中戦争』 外務省編 六一書房 2011
- ・石井弓 『日中戦争の集合的記憶と視覚イメージ』 中国研究月報 63(5), 1-22, 2009-05
- ・村上登司文 『戦争体験継承が平和意識の形成に及ぼす影響』 広島平和科学 2016
- ・ヨハン ガルトゥング他 『公開シンポジウム 教育と平和構築』日本教育学会第 69 回大会報告 2011
- ・清水一彦 『“もはや「戦後」ではない”という社会的記憶の構成過程』江戸川大学紀要 第 25 号 2015
- ・村上登司文 『中学生の平和意識についての比較—上海、ホノルル、デンバー、京都の 4 都市の中学生の意識調査から—』広島平和科学 31 2009
- ・村上登司文 『戦争体験を第 4 世代（次世代）に語り継ぐ平和教育の考察』広島平和科学 40 2018
- ・ピエール・ノラ編 『記憶の場：フランス国民意識の文化=社会史』岩波書店 2002
- ・大井真理子 『日中間の戦争の傷が未だ癒えない理由』BBC NEWSJAPAN 2020 年 6 月 23 日最終閲覧 <https://www.bbc.com/japanese/features-and-analysis-39475885>

1. 名前、タイトル（取り扱う予定のテーマ）

社会における学びの可能性に関する考察—イヴァン・イリイチの思想を手掛かりに—

2. テーマの概要や問題関心

「なぜするのか」の目的が明示されないまま、生活と学習をさせられる学校という機関。生活文化や、学び得たことが虚構でしかないと感じさせる学校という存在に違和感を覚え、これを批判的に検討する材料として、イヴァン・イリイチの唱えた「脱学校論」を再解釈する。

そして、日本において彼の唱えた学びの在り方に近い事例として、静岡県掛川市の「生涯学習宣言の町づくり」を取り上げ、その可能性について論じる。

3. 研究目的

イヴァン・イリイチの思想の再解釈と、現代におけるその可能性を論じるため。

「脱学校の社会」の日本における可能性を検討する。

4. 今後の予定・方針、研究の方法

8月から12月末まで留学の予定があり、そのカリキュラムと卒論執筆のボリュームを調整する必要がある。

2年前に作成した既存の内容があるものの、新たな検討事項や興味も出た。

日程を考慮しながら、内容を限定していく必要がある。

<検討事項・興味事項>

- ・「脱学校」思想の具体例としての、フォルケホイスコーレや思想家グルントヴィ
- ・日本でのフォルケホイスコーレの可能性
- ・公民館、社会教育と地域活性化

5. 参考文献リスト：

イヴァン・イリイチ著 東洋、小澤周三訳『脱学校の社会』（Deschooling Society）東京創元社、1977年

イヴァン・イリイチ著 渡辺京二、渡辺梨佐訳『コンヴィヴィアリティのための道具』（Tools for Conviviality）筑摩書房、2015年

イヴァン・イリイチ著 松崎 巖 訳『脱学校化の可能性』（After Deschooling, What?）東京創元社、1979年

大花幸子 「二宮尊徳の経済思想 分度と推譲を中心に」放送大学 1999年

外務省 「SDGs（持続可能な開発目標） 持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」

(http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/about/doukou/page23_000779.html、2017 年 12 月 20 日情報取得)

金子淳「静岡の社会教育小史：思想・実践・政策面に関する動向を中心に」『静岡大学生涯学習教育研究』14 号、静岡大学、2012 年、P25-34

四方利明 「イヴァン・イリイチの産業社会批判の理論における学校化論-「脱学校論」再考-」『大阪大学教育学年報』3 号、大阪大学、1998 年、P69-82

静岡県掛川市役所市民協働部 生涯学習協働推進課『地域における生涯学習の推進に関する基本方針』静岡県掛川市役所市民協働部 生涯学習協働推進課、2017 年

信金中央金庫「二宮尊徳が作り上げた報徳思想の実践～掛川信用金庫と報徳二宮～」2016 年 6 月 30 日 (<http://www.scbri.jp/PDFkinyuchousa/scb79h28s04.pdf>、2018 年 1 月 9 日情報取得)

榛村純一 『生涯学習都市ってなにやってんの：お茶と報徳の街掛川の挑戦』清文社、1984 年

榛村純一 『生涯学習まちづくりは村格・都市格へ』静文社、2007 年

榛村純一 『よみがえる二宮金次郎-報徳思想の再評価とその可能性』清文社、1997 年

田中智志 「＜名著再考＞イリイチ『脱学校化社会』」『思想』1123 号、岩波書店、2017 年(11) P121~128

内閣府 「平成 26 年度版 子ども・若者白書（全体版）」(http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26honpen/pdf/tokushu_01_02.pdf、2017 年 12 月 20 日情報取得)

新田照夫・望月彰 「掛川市における生涯教育政策」日本社会教育学会『日本の社会教育』30 号、1986 年、P90~101

山本哲士 『イバン・イリイチ：文明を超える「希望」の思想』文化科学高等研究院出版局、2009 年

石川 拓 「グルントヴィの教育思想とフォルケホイスコーレに関する考察」—佐々木正治による先行研究に着目して— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻『教育論業』第 58 号 2015 年

佐々木正治 『デンマーク国民大学成立史の研究』風間書房 1999 年

N.F.S グルントヴィ著 小池直人訳『ホイスコーレ上』風媒社 2014 年

1. 名前、タイトル（取り扱う予定のテーマ）
子どもの「虫殺し」に見られる未分化の聖性

2. テーマの概要や問題関心

本論では、子どもに特有に見られる「虫を殺す」行為を通じた遊びについて、それが「子どもらしさ」あるいは「無垢」のどのような側面によるものなのか、フランスの哲学者バタイユによる無垢概念と「聖なるもの」の性質をもとに分析する。子どもも大人も虫を殺すが、その態度は異なる。子どもはダンゴムシの群れを発見したとき、嬉々とした笑顔でそれらを踏み潰す（ときがある）。あるいは、トンボの羽根や頭を筆で。そこには邪魔な存在を排除するといった目的は見られず、ただその楽しさのみを目的とした遊びとして、大人による強い叱責を受けるまで持続する。このような子どもの「虫殺し」は、主に発達心理学において、発達によって抑えられるべき攻撃性あるいは残酷さの発露として扱われてきた。また、臨床教育学の面からは、それが好奇心の現れであり、保育者との豊かな経験を通してその残酷さが自覚され、それ以降はむしろ生物に対して優しくなるという、子どもらしい純粋さの裏返しのようなエピソードが語られてきた。いずれにしても、生命を剥奪するという行為の倫理的問題から、虫殺しは子どもという純粋で美しい存在の本質とは異なる、一過性のものとして扱われてきた。しかし、それらは大人と子どもの差異について一方向的な変化でのみ捉えている点に問題がある。また、大人がなぜハンティングや釣りを通した生命の剥奪に格別の楽しみを覚えながら、虫を遊びとして殺すことがないのか説明ができない。

これら「殺すこと」一般について、それがそれ自体を目的とする「遊び」となる根拠は、バタイユの「供儀」概念に求めることができる。いきいきとした生命が無為に奪われることを通して、人はその無為さと生命の終わりに感応し、言語的分節化を退けて世界と自己の存在が一体となったような「連続性」の感覚に浸ることができる。ゆえに殺しは遊びになり得るし、供儀という行為そのものが「聖なるもの」となる。しかし、大人にとってそれには、有用なるものが無為に帰されるという構造が必要となる。本論は、この構造が、「子ども infans=言葉なきもの※」から大人になる過程で獲得される存在の「事物性」と「内奥性」の二面性および「聖なるもの」の性質上の二面性を根拠とする点から、子どもが虫殺しにおいてそれに聖性を見出すことを主張する。

3. 研究目的

本論は子どもが虫を殺す行為について、既存の解釈で説明できない大人との連続性の問題を指摘し、残酷さの抑制が発達とともに獲得されるのではなくて、事物性の獲得がその行為を残酷さと結びつけ、有用性の無為な蕩尽を伴わない残酷さが聖性を失うことを、ジョルジュ・

バタイユの存在論および子ども・人間観から明らかにする。このように「虫殺し」を解釈した場合、教育現場における大人からの働きかけについても新たな視座が獲得される。現状では、子どもが虫を殺していた場合、それを叱責によって抑圧するか、あるいはその場では殊更に指摘せずとも他の小動物との触れ合いの中で間接的にそれを抑制する。社会規範や倫理的な側面からこれらが必要な教育的指導であることは確かである。しかしそれでは、子どもの存在そのものの発露たる行為に対して、その生き生きとした側面を認めることができない。虫殺しを肯定的に認め、讀えることに倫理的な問題があることは拭えないが、例えば「どんな気持ちだった？」と自身の内的体験に反省的な目線を向けさせることによって、より子どもの生における至高性の獲得に寄与する働きかけが可能であるかもしれない。

4. 今後の予定・方針、研究の方法

論証の水準を上げたうえで、バタイユの未読文献を参照しつつ、虫殺しを通した新たなバタイユ解釈に踏み込みたい。

5. 参考文献リスト：参考文献は読んでいなくてもいいので、なるべく多く、関心のある書籍、論文をリストアップしてください。目安としては、A4 用紙 1 枚程度は参考文献で埋められるようにしてください。

G・バタイユ.森本和夫訳."エロスの涙." 筑摩書房(2001).

G・バタイユ.酒井健訳."エロティシズム." 筑摩書房(2004).

G・バタイユ.酒井健訳."呪われた部分." 筑摩書房(2018).

G・バタイユ.山本功訳."文学と悪." 筑摩書房(1998).

G・バタイユ.出口裕弘訳."内的体験." 平凡社(1998).

宮崎康子."[研究論文] 教育・遊び・人形: ベルメール-バタイユにおけるメディアとしての人形/人間." 臨床教育人間学 (2007), 8: 35-44.

杉山幸子."幼児はどのようにして「死」に気づくのか." 八戸学院短期大学研究紀要(2013), 37: : 11-19.

横田祐美子."存在そのものの暴力性: バタイユにおける実存と道徳." 立命館大学人文科学研究紀要 103 (2014): 167-181.

酒井健."バタイユと「見出された幼年」: インファンティア概念への一視角." 法政哲学 13 (2017): 13-24.

野村洋平."新しい「無垢」概念の形成に向けて." ソシオロジ 51.1 (2006): 3-18.

森亘."G. バタイユにおける内奥性の概念--超越した世界の当たり前化をめぐる--." 京都大学大学院教育学研究科紀要 (2018), 64: 71-83.

井岡詩子."ジョルジュ・バタイユのエロティスム論におけるイメージのはたらき." 美学 68.1 (2017): 37-48.

濱野佐代子."幼児の動物の死の概念と、ペットロス経験後の生命観の変化に関する研究." 発達研究(2008), 22: 23-36.

渡辺保博. "BA スホームリーンスキーの幼児教育論." 教育学研究 53.1 (1986): 113-122.

山下久美, 首藤敏元. "虫との関わりが幼児の社会性の発達に与える効果について< 教育科学." 埼玉大学紀要. 教育学部 57.2 (2008): 105-121.

金子龍太郎, et al. "幼児と小さな自然との触れ合いのエピソード研究." 北陸学院短期大学紀要 30 (1998): 41-55.

井岡詩子. "ジョルジュ・バタイユにおける疲れ, 衰え, 窮乏." 関西フランス語フランス文学 21 (2015): 147-148.

神田浩一. "内的なドラマから死のシステムへ: バタイユにおける 「死」 の思想の変遷." 仏語仏文学研究 33 (2006): 123-142.

里見達郎. "G. バタイユにおける 「供犠」: 失われた 「至高性」 を求めて." フランス語フランス文学研究 35 (1979): 101-110.

酒井健. "ジョルジュ・バタイユの思想について--死の主題をめぐって." 法政哲学 3 (2007): 21-32.